

人類学博物館紀要 第 27 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 27 号

南山大学人類学博物館

2009

目 次

巻頭言

南山大学人類学博物館所蔵の「考古学研究の研究」に関する資料のアーカイブ化に向けて 附・第一展示室展示アルバム作成メモ追記	吉田泰幸… 1
博物館で資料を観察するということ —南山大学人類学博物館所蔵「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクション 整理作業を通して—	木田 歩… 19
南山大学人類学博物館所蔵パプア・ニューギニア資料の整理と再考	林 佑… 29
アンデス先住民が見た馬：未知から既知へ（1）	加藤隆浩… 35
中央アンデスの物質文化の歴史的連続性／非連続性 —友枝啓泰アンデス民族学画像コレクションに見られる農具の分析を中心に—	河邊真次… 47
民族誌ではないもう一つの方法	サガヤラージ・アントニサーミ… 69
南山大学人類学博物館資料評価委員会の活動から	大塚達朗… 79

巻頭言

不況の中の博物館

景気の先行きが全く見えないまま、2009年を迎えた。こんなときに真っ先に予算カットや無駄な施設として槍玉に挙げられるのが博物館をはじめとした文化施設である。アメリカのサブプライム問題に端を発する世界金融危機が起る以前に、その兆候はあった。2008年5月21日付の朝日新聞（夕刊）に、愛知県碧南市の藤井達吉現代美術館の予算が3割カットされ、市制60周年記念として予定されていた特別展は中止に追い込まれたことが報じられていた。碧南市は、財政力指数が1.685で豊田市に次いで全国2位である。そのような財政の潤沢な自治体ですらこの有様である。他の財政の苦しい自治体ではどのような状況か想像することは容易である。

こうしたときの行政側の判断は、常に生活が第一というものである。それはそれで一理あることはわかる。確かに明日どうなるかわからないときに、博物館も美術館もないかもしれない。だが、少し冷静に考えてみよう。

経済状況というのはある程度の周期をもって動いている。大不況は過去にも数回あったが、好景気も繰り返しおこっている。要は、今の嵐が過ぎ去るのをじっと耐えるしかないのだが、最悪な状況は必ず脱することができることは歴史が証明している。それにもかかわらず、このときばかりと文化施設にシワ寄せするのは、悪意なのか歴史を知らないのかかわからないが、あまりにも視野狭窄なものの見方である。嵐が過ぎ去った後に、草木一本残らない荒野が広がることを想像してみるといい。行政サービスが住民・市民への福利厚生であるとすれば、苦しい時代だからこそ、文化施設を守り抜く覚悟のある文化政策をとるのが、行政としての見識であろう。

一方、博物館のほうも、予算カットを嘆いているだけでは困難を乗り越えられまい。危機はチャンスである。不況の中では心がすさみ、犯罪に走る人も増えてくるのであれば、博物館や美術館に来てもらって、心を豊かにするような方法を考えるはどうだろうか。例えば、入館料をとっている館であれば、その無料化を図るなど方策はあるに違いない。もともと入館料収入だけで博物館の運営が厳しいことは、数々のデータが教えてくれているのだから。むしろ、こんなときだからこそ、博物館はその存在をアピールできるのではないか。そのような逆境に向かう発想が欲しいものである。

こうしたことが実現可能かどうかは館の考え次第である。予算削減で運営が難しければ、開館日数・時間を減らすなど対策はあるだろう。ただし、ここでやってはいけないことの一つは人員削減である。今企業のリストラ、とりわけ派遣切りが話題となっているが、組織にとって人を失うことほど大きな損失はないであろう。いったん人材を失えば、景気が上向いたときに再確保がスムーズに行くとは限らないし、一からやり直そうとすれば育成にかかる時間とコストは膨大なものになる。博物館でいえば学芸員だけでなく、事務職や嘱託職員まで含めて、人こそは博物館の財産であることを思い出してほしい。

それからもう一つ。博物館は資料を守り抜くことだ。博物館の本質は資料であり、コレクションである。極端に言えば、この不透明な時代に博物館はどうなるかわからない。しかし、資料があれば必ず復興することができる。

人と資料。この2大財産を守った館こそが、嵐が去った後に笑えるのである。

2009年3月
人文学部准教授 黒沢 浩

博物館で資料を観察ということ

—南山大学人類学博物館所蔵「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクション
整理作業を通して—

木田 歩

はじめに

南山大学人類学博物館では、2000年に「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクションを受贈した。本コレクションは、東南アジア大陸部山地に住むヤオ族やメオ族等の少数民族を対象に、歴史民族学的調査を行うため、上智大学教授白鳥芳郎を団長に、1969年から1974年まで3回にわたって実施された調査にて集められた学術資料である。

本コレクションは、収集や展示が目的ではなく、研究調査活動の一環として収集された資料である。そのため、調査団の研究目的を考慮しながら、調査団がなにを収集したのかを確認するだけでなく、なぜそれらを収集したのかを理解した上で、コレクションについて把握することを第1の課題とし、コレクション全体の整理作業を行った¹⁾。そして、確認を終えた資料を体系的に収蔵することを第2の課題として、コレクションの分類整理作業を行った。調査団の研究目的を鑑みれば、まずは民族をカテゴリーとして資料を分類することが望ましい。ところが、調査団が各資料へ貼付した資料ラベルの一部が受入時すでに脱落混在してしまっていたために、残念ながら、再現することが困難となった。さらに、寄贈資料を当館の資料として位置づけるためにも、既存の所蔵資料との関連性を視野に入

れて、新たな体系化を試みたいと考えた。そこで、資料の視覚情報を頼りに、それぞれの使用方法にもとづいて、個々の資料を分類し収蔵した。

当館が収集活動に直接関与した資料でなく、また、筆者も当該地域の調査経験や知識がない。調査団の作成した報告書や資料目録、台帳、映像資料等、さまざまな情報を参照しながら、あくまでも1点ごとに観察し、使用単位によっておおまかに分けていった。容易に使用方法を想像できるものもあれば、全く想像がつかないものもあった。こうして、整理観察の過程で、個別の資料に対しても様々な興味を持つ機会に恵まれた。

そこで、本稿では、本コレクションのなかでも、特に注目して観察整理作業を行った弩資料について紹介する。そして、この資料整理を経験したことから、あらためて博物館で資料を観察ということについて考察したことを述べる。

「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクション 弩資料について

東南アジア大陸部の山地諸民族における経済生活状況の把握を調査項目の1つとした調査団は、その報告書である『東南アジア山地民族誌』[白鳥(編) 1978]でも記しているように、非常に多様な種類の

標本資料を収集した。そのうち、本書にて「最も一般的な狩猟具」[量 1978：170]として示されている資料の一つに弩がある。

弩とは、矢を機械的に発射させる一種の弓であり、弓に比べ、矢の装着には時間がかかるものの、体力に関係なく強く弓を引くことができ、その機械的側面から矢の命中率が極めて高い利点があるという[渡辺1980]。

弧と弦からなる弓を水平にし、台身には弧部を直角に挿入するための方形孔を開け、さらに、弦をかける発射装置としての爪を設ける。台身には矢を安定して設置するための溝が刻まれる。これが基本的な弩の構造である²⁾。

その使用方法は、まず弦を爪にかけて、矢を台身の溝に置く。つぎに左手で台身を持ち、ねらいを定め、右手の指で爪を引く。すると弦が押し上げられ、矢が発射される(写真-1)。

コレクションのうち、筆者が確認できた弩資料は15点であった。その構造は基本的に同じであるが、発射部である爪部の形態に顕著な相違点が観察できたため、2つのタイプに分類した(表-1、図-1・2)。

結果として、いくつかの特徴が確認できた。

まず、個々のサイズに違いはあるものの、第1タイプの弩が第2タイプのそれよりも全体的に小さいサイズであった。

つぎに、第1タイプの弩は、弧との交叉部より前方の台身が大きく加工され、削られていた。よって、計量は行っていないが、第2タイプと比べて非常に軽量であった。

最後に、爪部だが、第1タイプは弦をかける部位は台身を直接削り、残りの部位は外側から取り付けている。一方、第2タイプは、爪部そのものを別に作製し、台身へ取り付ける形態となっており、外側から発射装置の内部構造の全貌を確認することができない³⁾。

当館所蔵の15点のみの観察結果から一般化することは難しいが、こうした特徴から、弩の形態の差異が、弩の使用者や製作者の技術的レベル、矢の飛距離や弩そのものの耐久性等となんらかの関係性があるのか、今後検討を重ねていきたい。

ある弩資料について

そもそも、筆者が弩に興味を抱いたのは、次のような体験からである。

前述したように、弩と思われる資料を整理作業のなかでまとめて並べてみた。そして、爪部の形態によって2つに分類してみたところ、どちらにも当てはまるとは思えない「弩」に“遭遇”した。それが資料JC-0559である(写真-2)。

この資料には、調査団の資料ラベルも番号注記もあるため、調査団が作成した資料台帳を確認したところ、やはり「弩」と登録されていた。しかし、資料そのものを他の弩と比較してみると、

- ①爪部に発射装置としての加工が施されていない。よって、矢を発射するメカニズムが理解できない。
- ②構成部位として、台身と弧の交叉部後方と、台身後部の2箇所には不必要なパーツがいくつか存在している。
- ③特に弧のサイズが大きく、抱えて使用することが困難である。

以上のようないくつかの疑問点が浮かび上がった。

そこで、この「弩」の使用方法について、上述の疑問点と資料写真をもとに、昨夏当該地域へ通訳として調査に参加していただいた山田泰正氏に聞き取り調査を依頼した⁴⁾。

その調査結果は次の通りであった。まず、現在ではこれと同様の「弩」は使用されていないということだが、ヒンテック村の62歳シャン族の男性がその使い方を知っていたという。

“Kang（弩） Tan（置く）”と呼ばれるこの「弩」の使用方法は、まず木などを利用して安定した場所を確保し、そこへ弦を爪に掛けた状態で弩を設置する。つぎに、弧部に設けられパーツを直角に立ち上げ、その窪み部に台身後部のパーツの先端部位を乗せる。乗せたパーツの先にヒモを取り付ける。そして、このパーツと連動している台身に近いもう1つのパーツを爪部上部に設置する。最後に矢を台身の溝に置く。イノシシやシカといった比較的大きな動物が狩猟対象であり、それらがヒモに足を掛けた瞬間、矢が放たれるということであった。

ただし、捕獲する動物の生態系に変化が生じたことや、食料を商店で購入することができること、殺傷力が強いため、使用上の危険性が伴うこと、そして、その使用が政府から禁止されていること等を理由に、現在では使用されていないということであった。

他の文献を調べてみると、たとえば渡部は「弩（地弩）」として、複雑な形態の弩を紹介し [1996 : 138, 217]、また、野林

は、使用方法や形態は不明であるが、雲南省リス族の設置式大型弩の事例を報告している [2002 : 120]。

残念ながら、映像等にて使用状況を確認することはできなかった。しかし、狩猟する目的という観点からすればもちろん弩ではあるが、何を狩猟の対象とするかによって、その形態や構造が異なってくるのが理解できた。つまり、空を飛ぶような動きの速い小型動物を捕らえることと、地を移動する中型動物を捕らえることにはそれぞれ異なる方法が必要なのである。こうして、なぞの「弩」は、狩猟対象の動物の生態にあわせて、基本的な弩の構造を発展させた弩であることがわかったのである。

博物館で資料を観察するという事

山田氏へ聞き取り調査結果をうかがった際には、調査団員であり、コレクションの寄贈者でもある量先生も同席して下さった。その時、量先生は「集めた時には、そうした形態の違いには気づかなかった」とコメントをくださった。このコメントが、そもそも博物館で資料を観察するとはどういうことなのか、あらためて考えるきっかけとなったのである。

同じ資料を目にしながら、なぜ疑問点や関心が異なっていたのか。ひとつには、資料を見る目的が異なっていたためである。すでに報告しているが、調査団は調査研究の結果として資料を集めた。そのため、その研究目的が資料の位置づけに大きく影響する。当該地域の経済活動を理解することを目的とした調査において、優先されることは、その具体的な活動内容を明確にすることである。その成果を提示するために

様々な生活用具が収集され報告されたのであり、それら生活用具それぞれの分布や来歴、起源を検討するための研究ではなかったのである。

もうひとつは、資料の観察状況の違いである。限られた調査期間の中で、調査目的を達成するために、観察や聞き取りに必要な内容は絞っておかなければならない。およそ40年前の調査当時、東南アジア大陸部山地に住む諸民族の歴史や文化を知るために、民族毎の生活によって、資料は収集され分類されていく。調査団はそうした文脈のなかでそれぞれの資料と出会っているのである。

一方、筆者は当該地域での現地調査の経験もなければ、資料整理を行う前から、弩の歴史や使用範囲に関して問題意識があったわけでもない。作り方や使い方といった基本的なことを含め、多くの情報が欠けているなかで、目の前に広がっている集められたモノをどのように理解することができるのか、試みたのである。

こうして、この整理作業を振り返ってみると、博物館で資料を観察するということは、資料に関する多くの情報が欠けているからこそ、想像力を働かせて、様々な可能性や興味関心を探求することなのである。そして、時にはその資料が誕生した文脈とは全く異なる世界を創り出していくことなのである。

そして、もう一つ重要なことは、見せることを前提に観察するということである。博物館で資料を観察調査することは、博物館に身をおくものにとって、あまりにも当たり前の日常的活動であろう。しかし、そもそも何を目的に観察するのか、何

が観察できるのか、意識的に思考することで、さまざまな資料の意味づけの可能性が広がる。本来、博物館は展示された資料を通したコミュニケーションが成り立つ場であり、興味や関心の異なる来館者や利用者が、資料に対する事前の知識をもたなくても、距離を縮めて身体感覚で楽しむことを提供できる空間である。そのようなあり方を想像してみると、見たことを伝えるのではなく、見せるために見る、ということに意識的であることで、展示や収蔵に大きな変化が現れるのではないだろうか。資料を一義的な利用で終わらせるのではなく、多角的な視点で観察することが必要なのである。

おわりに

ある日、「総合的な学習の時間」で来館していた中学生が、展示中の弩資料を見て、「これってボウガンじゃないか」と興奮しながら話をしていった。来館者も、自分の関心や知識、経験に沿って、資料を観察しているのである。それが可能なのは、何よりも、資料が収集され、登録され、さまざまな経緯を得て、当館に寄贈されたからである。

収集し、整理し、保存し、展示し、そしてまたバラバラにし、再編成する。博物館とは、きっと、こうした営みが幾重にも積み重ねられていく場なのである。

謝辞

数回にわたる聞き取りに応じて下さった上智大学名誉教授量博満先生と、タイにて聞き取り調査を行って下さった山田泰正氏にこの場を借りてお礼を申し上げます。

註

- 1) コレクションの全体的な内容については、木田 [2007] にて報告している。
- 2) 弩の各部名称は、様々であるが〔渡辺 1980〕、本稿では調査団員であり寄贈者でもある量の報告記述に従う [1978]。
- 3) 第2タイプと同様の弩については、八幡 [1963 : 12]、野林 [2002 : 121] を参照のこと。
- 4) 当館は、2006年度より「学術資料の文化資源化に関する研究」をテーマに、文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」のオープン・リサーチ・センター事業に採択された。本プロジェクトの目的は、当館で所蔵する考古学・人類学資料の基礎的調査研究の実施であり、本研究の分担体制として、7つの研究部会を設けている。その1つの「人類学部会」では、現在の西北タイ山地民族社会を再調査することで、およそ40年前に実施された上智大学の調査内容と比較しながら、社会文化変容の状況を捉えることを研究目的としている。2008年度は、2008年8月21日から9月1日まで現地調査を行ったが、山田氏には現地通訳として調査に同行していただいた。な

お、同氏は上智大学の調査時にも通訳をされていた。

参考文献

- 量博満 1978「第3章 1-経済生活」『東南アジア山地民族誌』白鳥芳郎（編）、講談社：161-185。
- 木田歩 2007「〔上智大学西北タイ歴史・文化調査団〕コレクション—調査団の研究目的を中心に—」『南山大学人類学博物館紀要』25：55-71。
- 野林厚志 2002「狩猟具としての弩弓—雲南怒族の弩弓製作とその射技—」『武器の進化と退化の学際的研究—弓矢編—』石井紫郎、宇野隆夫、赤沢威（編）、国際日本文化研究センター：117-129。
- 白鳥芳郎（編） 1978『東南アジア山地民族誌』講談社。
- 渡部武 1996『雲南少数民族伝統生産工具図録』慶友社。
- 渡辺一雄 1980「古代中国の弩—その出現と普及について—」『日本民族文化とその周辺 考古篇』国分直一博士古稀記念論集編纂委員会（編）、新日本教育図書：631-663。
- 八幡一郎 1963「中国古代の弩」『史潮』84・85：1-14。
- （南山大学人類学博物館特別嘱託職員）

表-1 南山大学人類学博物館所蔵「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクション
 弩資料一覧

	資料番号	収集年月日	収集地	収集民族	構成部位	サイズ (単位: cm)	備考
第1タイプ	1 JC-0560	不明	不明	不明	台身、弧、爪、弦	台身 62.3、弧 82.7	調査団ラベルあり、調査団番号注記あり、ただし記述内容異なる
	2 JC-0562	1969.12.28	Ban Pha Daeu, Amphur Mae Chai Chiengrai Prov.	Yao	台身、弧、爪、弦	台身 58.1、弧 70.7	調査団ラベルあり
	3 JC-0563	1972.01.08	Mae Tho	Meo	台身、弧、爪、弦	台身 69.8、弧 79.8	調査団ラベルあり、調査団番号注記あり
	4 JC-0564	1972.01.08	Mae Tho	Meo	台身、弧、爪	台身 68.9、弧 75.4	調査団番号注記あり、展示中
	5 JC-0565	1969.12.28	不明	Yao	台身、弧、爪、弦	台身 64.3、弧 71.2	調査団ラベルあり
	6 JC-0755	1972.01.31	不明	Yao	台身、爪	台身 53.7	調査団番号注記あり
	7 JC-0756	1971.12.16	Mae Cho	Meo	台身、爪。ただし、台身と弧の交叉部より前方なし	計測せず	調査団番号注記あり
	資料番号	収集年月日	収集地	収集民族	構成部位	サイズ (単位: cm)	備考
第2タイプ	8 JC-0556	不明	不明	不明	台身、弧、爪、弦	台身 78.3、弧 76.0	
	9 JC-0557	1970.03.16	Hueimak	Lisu	台身、弧、爪、弦	台身 83.0、弧 92.0	調査団ラベルあり
	10 JC-0558	不明	不明	不明	台身、弧、爪、弦	台身 71.6、弧 76.8	展示中
	11 JC-0561	1971.12.17	Mae Kam	Liso	台身、弧、爪、弦	台身 94.5、弧 102.3	調査団ラベルあり、調査団番号注記あり
	12 JC-0566	1971.12.11	Sen Chai	Akha	台身、弧、爪、弦	台身 84.6、弧 97.7	調査団ラベルあり、調査団番号注記あり
	13 JC-0567	1971.12.17	Mae Kam	Lisu	台身、弧、爪、弦	台身 77.8、弧 83.3	調査団番号注記あり
	14 JC-0701	1971.12.04	Huay Sai	Meo	台身、爪。ただし、台身と弧の交叉部にて破損	台身 74.5	調査団ラベルあり
	15 JC-0733	1972.01.17	不明	Lahu-ni	台身、弧、爪、弦。ただし、台身と弧の交叉部にて破損	台身 77.5、弧 70.5	調査団ラベルあり、調査団番号注記あり

(2009.01.20 木田作成)

Observing Materials in Museum: Some Aspects of Curatorial Activity

KIDA Ayumi

In 2000 the Anthropological Museum of Nanzan University acquired the collection made by the members of three expeditions to Northwestern Thailand (1969 – 1974), organized by Professor Yoshiro Shiratori at Sophia University, Tokyo. The collection includes cross-bows, the most popular hunting tool among the Yao and the Meo, living in the mountain area of Thailand.

Among the cross-bow collection, there is a special one which seems to be useless as a hunting tool; lacking a catapult, having extra parts unnecessary for hunting, and having too large arc. The members of the expeditions did not notice such differences, since their purposes were quite limited. By investigating the cross-bow, I realized that curators may have some good chance to reveal another world of materials in museum, and also observe those materials with the purpose of exhibiting to the public visitors, whose stand points are quite different from those of collectors in the field.



写真-1

整理番号：S40512 (F52)、タイトル：弩の試射
「上智大学西北タイ歴史・文化調査団撮影」



写真-2

資料番号：JC-0559、収集年月日：1971年12月19日
収集地：Ban Mae Cho、収集民族：Meo
サイズ（単位：cm）：台身 73.2、弧 118.3

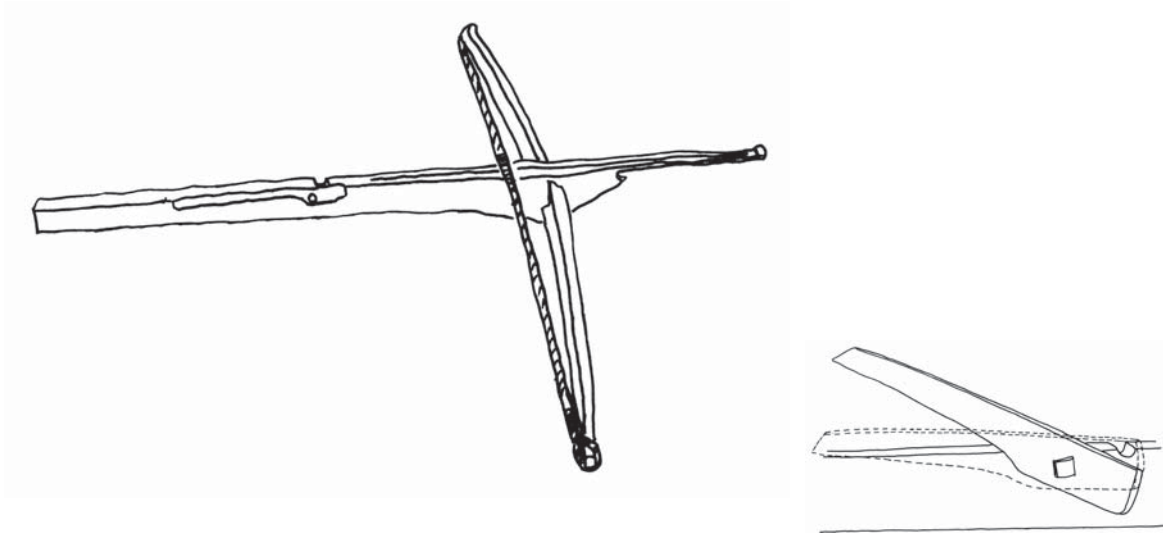


図-1 第1タイプ 弩（全体図、爪部拡大図）

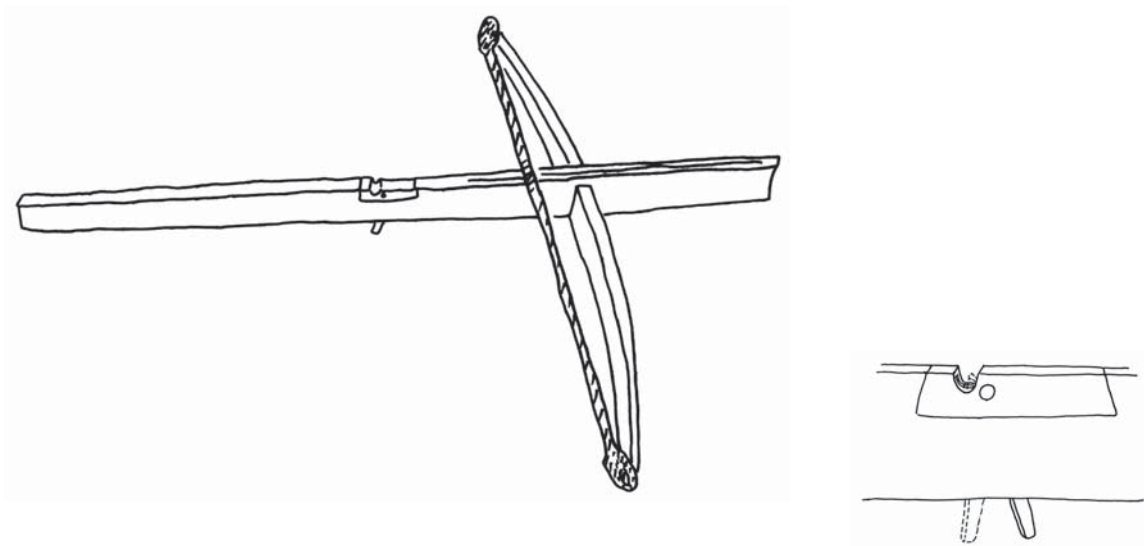


図-2 第2タイプ 弩（全体図、爪部拡大図）

南山大学人類学博物館所蔵の「考古学研究の研究」に関する資料のアーカイブ化に向けて 附・第一展示室展示アルバム作成メモ追記

吉田 泰幸

はじめに

2007年に刊行された『伊藤秋男先生古稀記念論集』に所収されている「中山英司と愛知の遺跡」(安藤・松原・伊藤 2007)は、南山大学人類学民族学研究所の活動記録でもあり、中山英司先生の吉胡貝塚調査時の野帳など、大変貴重な資料を収録している。その文末に伊藤秋男先生自らが、そうした貴重な資料群の入手経緯を記している。

「私が昭和44年(1969)南山大学に職を得て入った研究室が、私と入れ代わりに青山学院大学に移籍された吉田章一郎先生の部屋で、そこに無造作に残されていたのが、これらの貴重な資料である。別領域の先生が研究室の主となっていたら、ゴミとして捨てられる運命にあったかも知れない」(同:534頁)

この一節は、見る人が違えば「ゴミ」も「貴重な資料」になり、その逆もあるという、アーカイブ、ひいては博物館その他個人蔵までをも含めた、モノのコレクション全体の本質に根ざしたものに感じられる。こうした考古学史研究を彩る貴重な資料の「危機」は、そこかしこでおこっており、やもすると実際に消滅の憂き目にあっていることも予想される。

南山大学人類学博物館にも、「主に考古学資料の書類等が収められている棚(木製)」の存在が新旧スタッフ間の引き継ぎ

事項に含まれていたが、その記述からは扱いに窮していることがうかがわれ、事実ほとんど手をつけられていない状態であった。頻繁なスタッフ交代のうちに、記憶の風化が進行しかねないことを鑑みれば、これらも潜在的な「危機」に瀕していたとも言える。事務的な必要上から、筆者が2008年夏にこれらの内容の簡単な調査をおこなう機会があったが、その精査は懸案事項であった。

しかし、早川正一南山大学名誉教授が、これらの資料群に記された研究者名として数多く登場していることから、これらの資料についてうかがったところ、早川先生も、その扱いについては「懸案事項」である旨を述べられた。そのため、2009年1月28日に各資料についての短いインタビューをおこなった。その結果、資料群の来歴や詳細な内容について、当時を知る由もない者には、新たに判明したことが非常に多かった。本稿はその結果をふまえ、これらの資料群のアーカイブ化を目指した予備調査報告という形をとる。前記の「主に考古学資料の書類等が収められている棚(木製)」全てを整理しきれた訳ではなく、個々の資料の精査は相変わらず課題として残っているが、今後、これらの資料群に期待される活用形態を先に述べれば、例えば以下のようなものが挙げられ、これらは互いに関連し合うものと考えている。

a) 当館所蔵資料の周辺情報を充実させる。
当館所蔵・展示の考古資料は来歴に関する周辺情報が少ないものが多い。本稿であつかうような記録類の整理は、展示へのフィードバックも期待できるであろう。

b) 東海地方における、現在は消滅してしまつた諸遺跡の周辺情報を充実させる。
写真資料が多く含まれており、遺跡の調査当時の景観等、報告書には所収しきれなかった情報を引き出すことが期待される。

c) いわゆる「研究の研究」の進展に寄与する。

本資料群からは、具体的には南山大学における考古学・人類学史研究、東海地方における考古学史研究に寄与することが期待される。

考古学では以前から「学史研究」というサブテーマにおいて、研究黎明・発展期の記録類に対する関心は高かった。近年では板橋区郷土資料館にて開催された『夢を掘った少年たち』（守屋編 2005）にみるように、これが博物館の展示活動にまで昇華する例もある。今後、同様の活動の機運が東海地方で高まることも予想される。その際に、これらの資料の貸出などによるコミュニケーションの生成が、研究の活性化につながる可能性もある。

早川正一先生によれば、本稿で紹介する資料が収められていた木棚は、旧人類学民族学研究所 1 階の事務室にあり、中山英司先生の考古学・形質人類学に関わる資料が収納されていたもの、とのことである。そ

うした木棚に収められていた資料群の大半は、ひとまずそれらの記録を残したと考えられる主体の差異をもとに、分類することができ（このこと自体再検討が必要かもしれないが）、以下のようなになる。

1. 人類学民族学研究所の調査・研究活動に関する資料、陳列室の解説パネル類、事務書類
2. 1955 年に南山大学で開催された「連合大会」に関する資料
3. 人類学考古学研究会の調査・研究などの活動に関する資料
4. 文化人類学研究会の活動に関する資料
5. 南山大学の研究者が中心となっておこなわれた発掘調査に関する資料

これらが当館に残されていた詳しい経緯は別個の検討課題としてあるが、こうした簡単な分類からうかがわれることとして、これらの資料群は、現存しない組織が残した記録が大半である点と、大学としての研究活動以外の、同人的研究活動の記録も有している点が大きな特徴と言える。

もうひとつの特徴は、ネガフィルム・ガラス乾板・プリント等の形態の写真資料が多く含まれていたが、それらのほとんどは早川正一先生の撮影によるもの、ということである。これらをもとに、さらなるインタビューをおこなうことにより、短期間で多くの知見を得ることが期待できる。

以下、上記の分類をさらに細分した上で、それぞれの資料の概略を述べるが、記述は記録に記された年代順になっているわけではない。記述中、「・・・とのこと」、という伝聞表現を多用しているが、これらは早川先生から、インタビュー中に得られた情報であることを明記する必要上からで

ある。また、番号は本稿中での便宜的なもので、当館における資料番号を示している訳ではない。標題にもあるとおり、これらはアーカイブ「化」の途上にあるからである。

1. 人類学民族学研究所の調査・研究活動に関する資料、陳列室の解説パネル類、事務書類（写真1）

1-1：『石器時代遺跡地名表』（写真1-1）

おそらく「人類学民族学研究所」の活動の所産であろう、とのこと。上述の「中山英司と愛知の遺跡」（安藤・松原・伊藤2007）の参考文献中、「伊奈森太郎（年不詳）『石器時代遺跡地名表』（未発表）」というものがあり、これと同一のものかもしれない。わら半紙にペン書きされており、かなりの枚数がある。確認できた限りでは、愛知県内の遺跡地名表になっている。「所在地」、「遺跡」、「時代」、「遺物」、「所蔵者」、「文献」、「備考（面積現状等）」の項目がみられる。

1-2：『地方雑誌誌代送付表』など、図書購入に関係したと考えられる事務書類（同2）

「人類学民族学研究所」の名の入った便せん数枚に及ぶ。筆跡は稲垣晋也氏のものに思われる、とのこと。『両毛古代文化』、『上代文化』、『若木考古』などの誌名がみられる。

1-3：『行事予定表 人類学民族学研究所』（同3）

「人類学民族学研究所」の名の入った便

せん2枚。何年かは分からないが、7月のものと8月のものがある。愛知・三重・長野県への遺跡見学の予定が記されている。筆跡は稲垣晋也氏のものに思われる、とのこと。

1-4：『考古学関係郷土誌、学校刊行物、研究会報告 目録』（同4）

「人類学民族学研究所」の名の入った便せん数枚に及ぶ。研究所が所蔵していた考古学関係図書・雑誌の目録。筆跡は稲垣晋也氏のものに思われる、とのこと。

1-5：考古資料の手書き解説文（同5）

いずれも当時「人類学民族学研究所」に図工として勤務していた辻 元一氏の手によるものとみて間違いのない、とのこと。同様の筆跡で数枚あり、掲示されていた痕跡もみうけられる。現在でも当館展示考古資料の中で中心的な位置を占める愛知県入海貝塚、清水貝塚、白山藪古墳のものなど。辻 元一氏は『愛知県一宮市萩原町の弥生時代遺跡』（吉田編1960）などにおいて、土器実測図の作図者として紹介されているが、研究所の陳列施設の展示活動にも多大な貢献をしていたようである。

1-6：「杉山美代吉」氏から「伊奈森太郎」氏への書簡（同6）

内容は郷土誌原稿の青焼きのようであるが、詳細は不明。

1-7：『入海貝塚実測図』（同7）

愛知県知多郡東浦町文化財保存会編『入海貝塚』中、第二一図のものと同じのトレース図。稲垣晋也氏の手によるものであ

ろう、とのこと。

1-8：吉胡貝塚第二トレンチ平面図（同8）
カラーのトレンチ平面図。他に元図があり、それを写したものと思われるが、こうした仕事は上述の辻 元一氏によるものであろう、とのこと。

1-9：陳列室に掲示されていたと考えられる解説文（同9）

特徴ある辻 元一氏の字体と、写真の組み合わせで構成されたものが多い。テーマは「シナントロプス頭蓋骨」、「葬制の変遷」、「吉胡貝塚発掘調査」、「石鏃の刺さった人の脊椎骨」、「日本全図：先史時代遺跡・青銅器出土地」がある。

2. 1955年に南山大学で開催された「第十回日本人類学会日本民族学協会連合大会」に関する資料（写真2）

2-1：「三重 堀田吉雄殿」と宛名のある封筒（写真2-1）

差出人名は「第十回日本人類学会日本民族学協会連合大会」（スタンプ印）となっている。1955年におこなわれた同大会の事務書類であろう。最終的に堀田氏の手には渡らなかったもので、残されているのであろう。堀田吉雄氏は当時・三重県在住の民俗学者。

2-2：領収書（同2）

日付が「昭和30年」（1955年）、但し書きに「学会宿泊費内金」とあることから、「連合大会」に関連した事務書類であると考えられる。

2-3：第十回日本人類学会日本民族学協会連合大会出席者名簿（同3）

後述する「4-8：岐阜県武儀郡武儀村八幡遺跡発掘調査関連書類」中に、裏紙として利用されていたもの。大会に際しての事務書類と考えられる。

3. 人類学考古学研究会の調査・研究などの活動に関する資料（写真3）

3-1：フォトアルバム（写真3-1）

このアルバムの中に含まれている、伊藤秋男先生の若き日の写真は、星城大学の松原隆治氏より伊藤先生のご稀記念行事に際して貸出希望があり、貸出ししている。

収められている写真のほとんどは早川先生の撮影による。主として、当時助手であった稲垣晋也氏（人類学科の1期生で、のちに奈良文化財研究所へ赴任）を中心とする「人類学考古学研究会」のフィールドワークの様子を写したもの、とのこと。名古屋市瑞穂遺跡や、同南区の諸遺跡を巡った際の写真がおさめられている。現存しない瑞穂区丸山町丸山荘でのすきやきパーティの様子など、活発な活動がうかがわれるものが多い。その他、上智大学との交流行事の際の集合写真などがみられた。

3-2：『研究会帳 先史部門』（同2）

「人類学考古学研究会」には言語・民族・先史の3つの部門があり、そのうちの先史部門の活動記録。内容は「中山先生講演」と題したメモのほか、特筆すべきは「南山大学前窯跡発掘」とした発掘調査記録が数頁にわたっていることである。当館展示資料中に「南山教会古窯」とされた資

料が数点あるからである。何年かはうかがいしれないが、8月に発掘調査をおこなったようである。

3-3：『人類学研究会記録帳』南山大学人類学科（同3）

昭和38年度役員の名がある。同年度の活動記録を記したものの。このときはすでに後述する「文化人類学研究会」か？

3-4：『地図 研究会用』（同4）

「昭和29年3月現在 愛知県守山市志段見地区図」や、長野県内の5万分の1の地形図数枚。それぞれに「南山大学人類学考古学研究会」のスタンプ印がみられる。

3-5：『考古学研究会日誌 I 1962年度』（同5）

内容は勉強会のメモ、発掘調査の計画など多岐にわたっている。

3-6：出納帳（同6）

昭和31年度の研究会の出納帳。筆跡は稲垣晋也氏のものに思われる、とのこと。

3-7：「藤森栄一氏蔵庄ノ畑遺跡出土」とのメモがある土器断面図（同7）

メモ書きは1枚にしかないが、同様の土器断面図が数枚あり、一連のものと考えられる。人類学考古学研究会の行事で長野県に旅行した際、当時旅館を経営していた藤森栄一氏にお世話になり、そのときのものではないか、とのこと。

3-8：「昭和三十一年五月十日（木）瑞穂区一帯の遺跡見学」（同8）

35mm（24mm×36mm）フィルムネガファイル（DPEから渡される、フィルムシートをおりたたんだもの：以下同じ）で、2冊ある。ファイル内のメモは早川先生のもの、外部のタイトルは長谷部学氏の筆跡である、とのこと。3-1のフォトアルバムと共通する写真がある。撮影は早川先生。

3-9：タイトルのない35mmフィルムネガファイル（同9）

3-8と同一の棚に4冊みられた。「南山大学人類学考古学研究会」のスタンプ印がみられるものと、そうでないものがあるが、その内容は3-8同様、3-1のフォトアルバムと共通する写真があり、撮影も多くは早川先生の手によるものであろう、とのこと。

3-10：「伊藤」宛ての6×4.5判ブラウニーフィルムネガファイル2冊（同10）

早川先生はもっぱら6×6判ブラウニーフィルムでの撮影をおこなっていたので、早川以外の研究会メンバーによるものであろう、とのこと。内容は、長野県に旅行したときのものではないか、と思われるものが多数ある。

3-11：写真プリント多数

3-8～10と同一の棚に収められた写真プリント。内容から、「人類学考古学研究会」の活動をおさめたものではないか、とのこと。小林知生先生ゼミの英文テキストの複写プリント等もみられた。

3-12：篠東遺跡見学写真（同12）

「昭和三十四年岡崎市小坂井町篠東遺跡見学写真」と記された35mmフィルムネガファイル1冊。撮影は早川先生。後に発掘調査がおこなわれ、報告書が刊行（中村他1968）されることになるが、それ以前の研究会活動の際に撮ったものであろう、とのこと。

4. 文化人類学研究会の活動に関する資料
（写真4）

4-1：1969年に開催された『人類展 東
ニューギニア編』のパンフレット
（写真4-1）

編集責任者には後に中日新聞の記者となった岩田茂樹氏の名前がみられる。

4-2：1969年発行の『考古学陳列室ケース
案内』（同2）

当時図書館の3階にあった陳列室の案内。『南山大学五十年史写真集』（南山大学50年史作成小委員会編1999）にみられる陳列室のケースの配置と一致していることがうかがわれ、さらに詳細な展示内容を知ることができる。当時の展示意図などが、今後の研究対象になりうるであろう。

4-3：1972年発行の『考古学陳列室ケース
案内』（同3）

編集は「文化人類学研究会 考古学サークル」となっている。

4-4：1977年発行の『南山大学人類学研究
所附属陳列室』パンフレット（同4）
編集責任者の一人には愛知県埋蔵文化財

センター宮腰健司氏の名前がみられる。

4-5：『長良川流域調査シリーズ（昭和37
～46年）』南山大学人類学研究会考
古学サークル（同5）

当館展示資料である「赤土坂遺跡」、「陽徳寺遺跡」、「武芸八幡遺跡」、「恵日山遺跡」、「岩井戸遺跡」、「衣岩遺跡」を含む長良川の支流、板取川流域の発掘調査成果をまとめたもの。陳列ケース見学の際の参考にしてほしい旨、記されている。

4-6：『考古・ニューギニア展』チラシ
（同6）

何年におこなわれたものかわからないが、おそらく「文化人類学研究会」主催のものであろう、とのこと。

4-7：長良川流域調査に関わる資料1（同7）

『埋蔵文化財包蔵地カード』は記入されたものと、未記入のものがある。その他、「稲荷遺跡」と記された35mmフィルムネガファイル1冊など、調査に関連した記録類が一括してひとつの棚に収納されていた。同棚内に、研究会の活動記録が記されたリーフレット類があり、「43年度役員」の中の会長には「森部 一」氏の名前がみられる。

4-8：岐阜県武儀郡武儀村八幡遺跡発掘調
査関連書類（同8）

調査成果は雑誌『古代文化』誌上に報告されている（市野他1966）。小林知生先生名での埋蔵物発見届や、文化財保護委員会からの小林先生あての事務書類がみられ

た。これらから、調査が1963（昭和38）年におこなわれたことがわかる。遺物の保管先は南山大学人類学研究所となっている。発掘調査自体は研究会の学生主体でおこなわれた、とのこと。同一棚に35mmカラーライドが残っている。その中には、展示資料と同一のものとおぼしき土器片が映っているものがあり、精査が待たれる。

また、同じく同一棚にのこされた資料整理用と思われる台帳は、「第十回日本人類学会日本民族学協会連合大会」出席者名簿（資料2-3）の裏面を利用しているものだった。

4-9：感想ノート（同9）
陳列室におかれていたものと思われる。

4-10：岐阜県関市北野遺跡発掘調査に関する資料（同10）

「北野遺跡試掘」とタイトルがふされた図面の青焼など。図面に記された日付が「S.43.11.23~24」となっていることから、文化人類学研究会が参加したものか。関高校社研部、美濃考古学研究会の名も図面中にある。

4-11：長良川流域調査シリーズの展示説明図（同11）

大判の紙にマジックで書かれた展示説明図。4-5に関係するものかもしれない。

4-12：長良川流域調査に関わる資料2（同12）

昭和43年の長良川流域調査の調査カードや地形図、参考資料として用いたのか、美

濃市郷土史編集委員会編の『郷土読本美濃市の歴史』が一つの棚にまとめられていた。

5. 南山大学の研究者が中心となっておこなわれた発掘調査に関する資料（写真5）

5-1：『三重県尾鷲市曾根遺跡・愛知県豊田市市塚古墳』フォトアルバム（写真5-1）

アルバム内の写真はほぼすべてが早川先生の撮影によるもの。写真に付された手書きのキャプション等はすべて長谷部学氏のもの。

三重県尾鷲市曾根遺跡の調査は、昭和33~36年におこなわれた、中日新聞社主催の「伊勢湾周辺総合学術調査」（佐々木他1961）の一環としておこなわれたもので、名古屋大学との合同調査であった、とのこと。写真中には、名古屋大学出身で、当時は愛知学院大学に転出していた大参義一氏の姿もある。

5-2：「昭和三十四年三重県尾鷲市曾根発掘」と記された6×6判ブラウニーフィルムのネガファイル（同2）

2冊みられた。メモの筆跡は早川先生のもの。すべて早川撮影。35mmフィルムだけでなく、ブラウニーフィルムでの写真撮影も専ら早川先生がおこなっていた、とのこと。

5-3：写真ガラス乾板「チャンチャカヤマ古墳出土遺物」のメモあり（同3）
豊橋市チャンチャカヤマ古墳は東名高速

道路建設工事にともなって発掘調査をおこなった、とのこと。写真ガラス乾板撮影も早川先生がおこなった。

5-4：写真ガラス乾板「桜井町二子遺跡出土遺物木製品」のメモあり（同4）
チャンチャカヤマ古墳同様、東名高速道路建設工事にともなって発掘調査をおこなった、とのこと。両乾板は同一の箱に収められていた。

5-5：豊田市市塚古墳発掘調査関連資料（同5）

「昭和三十四年九月 古墳発掘日誌 市塚古墳発掘事務所」と記された発掘日誌や、作業員の勤務表、調査現場で用いられたであろう「係でない方は無断で古墳へ立ち入らぬように願います 発掘事務所」のサインなど。発掘期間中に伊勢湾台風に見舞われたことをよく覚えている、とのこと。35mm フィルムネガファイルも1冊みられた。

5-6：前畑遺跡発掘調査報告原稿（同6）

1968年に刊行された『矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告』（吉田他1968）に所収の前畑遺跡調査報告の原稿。本文は原稿用紙にペンで記され、図の指定や校正の赤字が入っている。

5-7：「豊橋市嵩山」関連（同7）

「豊橋市嵩山 昭和35年八月」としてされた封筒の中に、洞穴の図面が数葉入っていた。作図者名には「小林知生・早川正一」の文字。当時、小林先生はヨーロッパにおける諸洞穴遺跡同様の壁画の発見を目

指した洞穴探索に熱心であった、とのこと。

5-8：矢作ダム関連発掘調査に関わる書類（同8）

「竜淵寺遺跡」、「牛池永原遺跡」、「生駒小学校北遺跡」、に関わる調査日誌、出土遺物台帳、出納帳、図面類。吉田章一郎先生名での、講義欠席願もみられた。これらから、調査が1967（昭和42）年におこなわれたことがわかる。

5-9：三重県四日市市東日野遺跡発掘調査に関する資料（同9）

35mm フィルムのネガファイル2冊の撮影はいずれも早川先生。その他、東日野遺跡発掘調査時のものとして間違いない写真プリントが数枚みられる。この調査は四日市市の団地開発にともなう発掘調査として行われ、三重大学との合同調査であった。三重大学側の教員は歴史教室の服部貞蔵先生、とのこと。調査の報告書は刊行されているが（小玉他1966）、三重大学歴史研究会古代史部会による『東日野弥生後期住居址発掘調査報告展』が1冊みられた。ガリ版刷りで、日付は「1967.11.2.3」とある。

5-10：三重県御座白浜遺跡発掘調査に関する資料（同10）

「昭和三十五年八月二十三日～二十八日 三重県志摩郡志摩町御座白濱遺跡」と記された35mm フィルムネガファイルが3冊。撮影は早川先生。ファイルには使用したカメラ・フィルム名も記されている。その他、35mm カラーフィルムスライドがみられた。この調査は5-1と同様に、中日新

聞社主催の「伊勢湾周辺総合学術調査」の一環としておこなわれた、とのこと。

5-11：愛知県一宮市尾張病院横遺跡発掘調査に関する資料（同 11）

「昭和三十四年愛知県一宮市尾張病院横遺跡」と記された 35mm フィルムネガファイルが 1 冊、「一宮市尾張病院横出土弥生式土器」と記された 35mm フィルムネガファイルが 3 冊。いずれも早川先生撮影。6×6 判ブラウニーフィルムの「尾張病院航空写真昭和 34 年撮影」というネガファイルもあるが、こちらについては記憶がない、とのこと。現在では弥生後期の土器型式である「山中式」の標識遺跡として知られており、調査成果は『愛知県一宮市萩原町の弥生文化遺跡』（吉田編 1960）に収められている。

5-12：中津川古窯址発掘調査に関わる資料（同 12）

「33.5.28～31 中津川古窯址発掘スナップ」と記された 35mm フィルムネガファイルをはじめとして計 5 冊のネガファイルがみられた。その他、写真ガラス乾板もみられた。写真撮影はすべて早川先生。この調査には、南山大学をはじめとして、名古屋大学の榑崎彰一先生や、東京大学の大学院生も参加した、とのこと。

5-13：岐阜県丹生川村根方岩陰発掘調査に関わる資料（同 13）

35mm フィルムネガファイルが 4 冊、35mm カラーズライドが 2 箱、いずれも撮影は早川先生。そのほか台帳類などの書類が封筒に収められている。

1963 年におこなわれた発掘調査で、日本考古学協会洞穴調査委員会編『日本の洞穴遺跡』所収の報告（小林他 1967a）に概要が記されている。

5-14：愛知県豊川市念仏塚第 3 号古墳発掘調査に関する資料（同 14）

日誌が 1 冊、35mm フィルムネガファイルが 4 冊みられた。写真の撮影は早川先生。

調査は日誌タイトルにあるように、東名高速道路建設による土取りに伴いおこなわれた。早川先生は下層等で発見された旧石器資料の調査研究を中心におこなった。その報告（小林・早川 1967）の原稿もみられた。

5-15：愛知県渥美町保美貝塚発掘調査に関する資料（同 15）

日誌 1 冊、35mm フィルムネガファイル 2 冊。写真の撮影は早川先生。ネガファイルに記された日付は「昭和 40 年 8 月 5～11 日」、その他図面類が封筒に収められている。

5-16：愛知県豊川市三河国分尼寺発掘調査に関する資料（同 16）

「三河国分尼寺発掘日誌」1 冊のほか、発掘調査の際の参考資料として、「三河国分尼寺発掘調査の栞」が用いられており、それもみられた。また、「昭和 42 年 9 月 豊川南中 鈴木範一」による「三河国分尼寺緊急発掘ノート」もみられた。その他図面類がみられた。

5-17：豊田市神明遺跡発掘調査に関する資料（同 17）

図面類、出納帳などの事務書類のほか、手書きの調査団の出欠表がある。出欠表からは南山・上智・大阪市立大学の学生が参加していたことがわかる。当時大阪市立大学の学生であり、のちに京都外語大学教授となった大井邦明氏の名前もみられる。

5-18：愛知県宝飯郡一宮町日吉原遺跡発掘調査に関する資料（同 18）

図面類のほか、発掘日誌が 1 枚だけ離れた形でみられた。昭和 37 年 8 月の調査であることがわかり、その日誌の筆跡は長谷部学氏のものと思われる、とのことである。

5-19：愛知県佐久島における発掘調査に関する資料（同 19）

埋蔵物発見届・埋蔵文化財保管証の下書き？や図面類。図面のひとつには、1966 年 12 月 23～24 日との日付がみられる。ユースホステル下に横穴式石室があることがわかり、そのことが調査のきっかけだった、とのこと。

おわりに—今後の課題—

これらの資料群に関する今後の課題は、保存環境の改善とその精査、加えて「はじめに」で挙げた予想される活用形態 a)、b)、c) を進展させることであり、それぞれについて多岐にわたる。

まず、現在の資料の状態は非常によくない。わら半紙やガリ版刷りの紙資料、写真フィルム・乾板が多く、保存環境の改善が

必要である。

環境改善を含む収蔵方法変更の前提として、資料群のさらなる精査が必要と考えられる。その結果によっては、本稿の便宜的な分類も見直さなければならなくなるだろう。本資料群の特徴は、多数の写真のほとんどが早川正一先生の撮影、ということである。その形態はネガやプリント、ガラス乾板であり、例えばデジタルスキャナを用いてある程度の解像度でスキャンし、写真群を一覧しやすいようにすれば、それをもとにさらなるインタビューをおこなうことが可能と考えられる。

これらの課題解決の先に、冒頭に挙げた、a) 当館所蔵資料の周辺情報を充実させる、b) 東海地方における、現在は消滅してしまった諸遺跡の周辺情報を充実させる、c) いわゆる「研究の研究」の進展に寄与する、という活用形態三者の進展が期待される。これらはさらに多くの情報提供者や研究者の協力を必要とすることから、資料群を契機とした各種コミュニケーション生成の場として博物館が機能することも、期待されることのひとつであり、課題とも言える。

謝辞

インタビューに応じていただき、懇切丁寧な御教示いただいた、早川正一先生に深謝の意を表します。

参考文献目録（アルファベット順）

愛知県幡豆郡一色町. 1967. 佐久島の古墳—一色町誌資料第 1 輯—. 一色町誌編纂委員会：愛知県一色町
安藤義弘・松原隆治・伊藤秋男. 2007. 中山

英司と愛知の遺跡. 伊藤秋男先生古稀記念論集. pp.383-536. 同刊行会・名古屋

市野哲哉・杉浦昭夫・早川正一. 1966. 岐阜県武芸八幡遺跡の発掘調査—第一回長良川流域調査シリーズ—. 古代文化. 16-5. pp.116-126. 古代学協会：京都

小玉道明・他. 1966. 四日市市埋蔵文化財調査報告第1集—東日野弥生住居址群・岡山古窯址群第1号窯—. 四日市市教育委員会・四日市遺跡を守る会：四日市

小林知生・他. 1966. 保美貝塚—渥美町史資料第2輯—. 愛知県渥美郡渥美町教育委員会：愛知県渥美町

——・他. 1967a. 根方岩陰. 日本の洞穴遺跡. pp.175-188. 日本考古学協会洞穴調査委員会：東京

——・他. 1967b. 神明遺跡. 東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告. pp.1-36. 愛知県教育委員会：名古屋

小林知生・早川正一. 1967. 念仏塚第3号墳発見の石器について. 東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告. pp.116-121. 愛知県教育委員会：名古屋

守屋幸一編. 2005. 夢を掘った少年たち. 板橋区立郷土資料館：東京

永井英治. 2007. 学会アーカイブズという課題. 名古屋大学文書資料室紀要. 15. pp.45-69. 名古屋大学文書資料室：名古屋

中村文哉・他. 1968. 篠東. 愛知県小坂井町教育委員会：愛知県小坂井町

中山英司編. 1955. 入海貝塚. 愛知県知多郡東浦町文化財保存会：愛知県東浦町

南山大学50年史作成小委員会編. 1999. 南山大学五十年史写真集. 南山大学：名古屋

坂井忠夫・吉田英敏他. 1970. 富加村の古墳.

富加村教育委員会：岐阜県富加村

佐々木宣明・伊藤秋男・早川正一. 1961. 考古編. 伊勢湾をめぐる文化史. pp.22-37. 中部日本新聞社：名古屋

吉田章一郎編. 1960. 愛知県一宮市萩原町の弥生文化遺跡. 愛知県教育委員会：名古屋

——・他. 1967. 念仏塚第3号墳. 東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告. pp.104-108. 愛知県教育委員会：名古屋

——・他. 1968. 前畑遺跡. 矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告. pp.50-66. 愛知県教育委員会：名古屋

附記：第一展示室展示アルバム作成メモ追記

記録類とそれらへのアクセスを容易にするアーカイブ化の重要性は、当館展示資料調査でも同様である。

展示室においてひときわ目立つ丸木舟の出土地は、近年のスタッフの間では不明になっていたが、千葉県印旛郡阿蘇村神野（現：八千代市）の可能性が高い、との領塚正浩氏の書簡が存在していた。こうした日本考古学研究所で所蔵していた資料の調査は断続的に進められていたようであり、この種の調査の記録やメモ類の体系的な整理も、同様の考古資料を多く抱える当館に固有の課題と言えそうである。

また、前号（当館紀要第26号）で文献にみる元刈谷貝塚出土牙製勾玉と酷似する製品（写真6）について記したが、刈谷市教育委員会の鶴飼堅証氏より、文献にみる牙製勾玉は刈谷市で確かに所蔵している、との御教示をうけた。資料にはかすかに「ホビ」とも読める朱書があるので、同製

品は保美貝塚出土のものであろう。動物の同一部位を利用し、そのサイズに穿孔個所も規制をうけるため、酷似する資料となったとするのが妥当であろう。今後は、両遺

跡で同一部位を利用すること自体の背景や、意味を考察することが求められる。

(南山大学人類学博物館特別嘱託職員)

**Building up Archives for ‘Studies of Archaeological Study’
Appendix: Supplement to ‘Compiling a Photographic List of
Archaeological Exhibits’**

YOSHIDA Yasuyuki

There remain several materials on the archaeological study collected and/or composed by the staff of the Anthropological Institute of Nanzan University (the former organization), or by students who were acting in the Society for the Study of Cultural Anthropology. Since the staff of our museum has been frequently changed and therefore the information was sometimes to be lost, it is now difficult to estimate the value of such materials.

This report, based on the interview with Professor Emeritus Shoichi Hayakawa, informs each material in order to build new archives for ‘studies of archaeological study’, hoping that we will contribute to further investigations.



写真1 人類学民族学研究所関連資料



写真2 日本人類学会日本民族学協会連合大会関連資料



写真3 人類学考古学研究会関連資料



写真4 文化人類学研究会関連資料



写真5 発掘調査に関する資料



写真6 附記関連資料

南山大学人類学博物館所蔵パプア・ニューギニア資料の整理と再考

林 佑

はじめに

今回は、2007年度と2008年度にかけて行った南山大学人類学博物館が所蔵しているパプア・ニューギニア（以下ニューギニアと略す）の資料整理の概要とその結果について報告させていただく。ニューギニア資料の整理に関しては、前任者の山崎剛氏がすでに資料カード目録と資料台帳を統合した、新しい台帳を作成していただいております、作業はこれに沿って行った。

ニューギニア資料の経緯

南山大学人類学博物館において、ニューギニア資料は、1964年に行われた、南山大学ニューギニア学術調査団の調査の際に収集されたものと、ニューギニアの地において20年以上も研究されていたH. Aufenanger氏の寄贈によるものとに分類することができる。今回資料整理の主な対象となるのは、前者のものであり、学術調査団の中で考古学班として調査をされた、早川正一先生・小林知生先生が収集された資料が中心となった。この資料は、2005年度に早川正一先生によって南山大学人類学博物館に寄贈を受けたもので、1964年のニューギニア学術調査団の成果を展示している当館において必須ともいえる重要な資料として新規に登録されることになった。

南山大学ニューギニア学術調査団における考古学班の調査内容

南山大学ニューギニア学術調査団は、民族学班、考古学班、言語学班等に分かれ、それぞれニューギニア各地で調査を行っていた。民族学班の沼沢喜市先生、考古学班の早川正一先生・小林知生先生収集の資料が今回の整理対象となっている。沼沢喜市先生の調査内容に関しては1970『ニューギニア・ピグミー探検』大陸書房や、1971『W・シュミット記念論文集』に詳しく書かれているのでそちらを参照していただきたい。ここでは、考古学班の調査の足取りとその収集物について紹介する。

考古学班は1964年8/23名古屋→8/24羽田→8/25シドニー→8/29 port・moresby→8/31Gorokaに到着、9/1～12/20まで調査を行った。調査地はGoroka・Mingende等で、発掘調査が主体となっている。

早川正一先生寄贈のニューギニア資料の概要

1. 考古学班の収集資料

考古学班の収集資料の中で大部分を占めるのは、発掘調査時に収集した小剥片等の石器である。発掘調査は、Tsak-Pumakos A・B岩陰、Anbannigl洞穴の三箇所で行われており、1971『W・シュミット記念論文集』の中で報告をされている。

主な収集地と収集品は、Tsak-Pumakos

の磨製石斧・Komnugiの磨製石斧・Gorokaの小剥片石器・Mingende/Agualの剥片石器、磨製石斧である。

次に、調査地の現地の人々から物々交換や購入という形で集められた磨製石斧が多い。主なものを列挙していくと以下のようになる。

装飾石斧・環状石器・真珠母貝製首飾・真珠母貝製胴飾・額飾・頭飾・帽子・手編み袋・腰紐・叩き石・弓・矢・祖霊像・口琴・骨製短剣・石皿・石棒。
これら資料は全部で739点あった。

2. 民族学班の収集資料

民族学班の収集資料は、寄贈されたものでは、沼沢喜市先生が収集されたニューギニア各地の磨製石斧（Ainok・Bilumfivap・Gebran・Salemp・Songuvak・Tamiyok・Warabun・Wolomer・Womuk・Aiome）が計104点であった。

新規資料登録

新規資料の登録には早川正一先生に一点ごとの資料データの作成、また聞き取り調査という形で資料に関してできる限りの情報を与えていただき、もともと博物館で作成されていた資料カードを参考に、それらデータを資料台帳に反映させていくこととなった。

具体的には、資料に収集地名＋整理番号のシールを作成し、本登録前の便宜を図り、登録漏れがないように注意した。その後、一つの資料に対して資料番号、資料名、収集者、収集年（分かれば月日）、寸法、収集方法、資料の特徴、備考、収蔵場所の項目を設定し、データを作成した。

また、新規資料登録の際に、調査団で使用した、ポラロイドカメラ、通信用トランシーバ、携帯ラジオ、写真撮影用一脚、マイク、携帯録音機といった非収集資料もこの調査の様子を示すものとして登録した。

資料への資料番号の注記に関しては、もともと南山大学人類学博物館に所蔵されているニューギニア資料が「11-〇〇〇」というかたちをとっていたため、番号の重複がない様に11-1000から開始し、11-1842までの番号をそれぞれ資料に注記し、注記が消えないようニス塗り、計843点を博物館資料として新規に登録した。

おわりに

ここまで、2007・2008年度に行った、ニューギニア資料整理に関する報告をさせていただいた。最後に、これら資料を整理している際に気づいた点等を記述させていただき、結びに代えたいと思う。

1964年のニューギニアの調査に関して、早川正一先生は「かれらの保持している物質文化を通じてかれらの石器時代の姿を洞察し、考古学的に分析することを目的とする」と調査目的を明らかにしている。実際に、この1964年当時の新聞記事にも見られるように、日本に映るニューギニアとは、「現代に残された未開の地」、「最後に残る秘境」、「最後の石器時代人が残る地」など、文明が未だに入っていない地として大きく取り上げられている。もちろん、この頃には、港町など低地にはすでにある程度の現代的なモノがニューギニアでの生活の中に入ってきており、完全な未開とはいえないが、すくなくとも、研究者においては、未だに石斧などの石器を使い続ける

人類に大変な興味関心を持っていたことは間違いない。また、南山大学の学術調査団が調査に入る前の、調査団壮行会の様子をテレビ番組にしているように当時のニューギニア調査への、期待が窺える。南山大学ニューギニア学術調査団は、正にこうした流れを踏まえた調査を行ったことになると考えられる。それは人類学的に見れば、先史時代で主として使用されていた石器が1960年代にも現役として使用され、消費されていたことをじっくりと長い目で観察することにより、人類の本質の一端に迫れることなのかもしれない。例えば、今回のニューギニア資料のうち、磨製石斧をはじめとする多くの石器の寸法を測る機会があったが、基本的にその縦横の比率は2:1が圧倒的に多く、石斧の機能としては、この比率が最も効率的で合った可能性を示していると思われる。

このように、単純に寸法の傾向を知るだけでも、人類学の探求目的である、人類を知ることにつながり、まだまだ資料の扱い方次第では更なる発見ができるのではないだろうか。

もう一つこの南山大学ニューギニア学術調査に関しては、純粋に調査のみだけではなく、太平洋戦争中にこの地で亡くなられ

た戦没者の方々の慰霊式が、現地と調査終了後の日本において和・洋両方の形式で執り行われている。このことは、ニューギニア資料整理の際に、沼沢喜市先生・早川正一先生宛てのニューギニアで戦死された遺族からの「現地で砂や小石を持ち帰ってきたい」という手紙が多数見つかったことで知った。その戦争に関連するかもしれない資料として日本兵を象ったと思われる、祖霊像が資料整理で見つまっている。それがそのまま戦争に関するものかどうかは、資料の詳細が不明であり、直接的には結びつかないかもしれない。しかしこれは、ニューギニアという地が、第三者的な好奇心のみで見つめるだけではなく、戦争にも関係している地としてみている方々もおられることを決して忘れてはならない、ということを知ることができたように思う。

以上、ニューギニア資料の整理に関して考えたことを記述させていただいた。今後のニューギニア資料展示に活かす事が出来れば良いと思うし、資料がもつ人類学的な意味・意義について、ニューギニア資料に限らずこれからも模索していきたいと思う。

(南山大学人類学博物館臨時職員)

Newly Registered Collection from New Guinea

HAYASHI Yu

This report gives a brief overview and some comments on the new registration of materials from New Guinea, which we have carried out in 2007 and 2008.

Our collection from the area includes two major parts; the one was made by Professor H. Aufenanger at Nanzan University who carried out fieldwork in New Guinea for more than twenty years, the other by the members of the expedition organized by Nanzan University in 1964. The latter materials, both archaeological and ethnological, which we newly registered during the last couple of years, were given in 2005 by Professor Emeritus Shoichi Hayakawa, who had been among the party in 1964.

During the registration process, I noticed that the anthropological fieldwork in New Guinea was considered to be very important even in the 1960s, for the indigenous people there continued to spend the primitive life which was expected to give some implications about the prehistoric lifestyle. The materials also give some information about the aftermath of the Pacific War.



写真1 日本兵を象ったと思われる祖霊像



写真2 遺族の住所等を記した書類



写真3 慰霊式開催通知の書類



写真4 南山大学学術調査団壮行会進行台本

アンデス先住民が見た馬：未知から既知へ（1）

加藤 隆浩

1. はじめに

スペインによるタワンティンスーユ（インカ帝国）征服という出来事とその後の変化については、これまでに気の遠くなるほどの数の論考が蓄積されている（cf. 網野2008）。政治、経済、社会、宗教をはじめとする文化に焦点を当てるものがそのほとんどであり、征服の経緯やその結果について分析をするのが常套であった。しかし、考えてみれば、スペイン人征服者にとっても被征服者側のタワンティンスーユの人々にとっても、1532年以前は互いに見知らぬ存在であり、征服は、未知の人間・社会・文化の出会いがその前提であったということ、また、後に事例を呈示するように、それぞれの相手に対する見方が歴史の動く方向を変えたかもしれないという2点を考慮すれば、これまでにわき上がった議論、すなわち、征服後に政治や経済、社会や文化がいかように変化したかというような問題とは別に、両者が互いをどのように認識していたかという当事者たちの民俗的思考についてももっと考察されてもよいのではないかと考える。その歴史の転換期まで互いにまったく未知であったものを、各々の文化あるいは社会に属する人々がどのように捉え認識していったかを検証することは、決して意味のないことではないはずである¹⁾。こうした問題意識に立って明らかにしようとするのは、歴史的出来事の

表面に泡のように出てくる事象というよりも、むしろそうした現象を根底部分で支え方向づける原理のようなもの、言い換えれば、歴史の舞台で生起するさまざまな出来事に比しては控えめだが、思考論理という不可視な観念として歴史の流れを作っていくという点において案外大きな意味をもつものである。こうした主張は、研究対象の地域や時代こそ違え、フランス歴史学のアナール学派があげてきた華々しい成果を想起すれば、もはやこれ以上の余計な議論は無用と思われる²⁾。

具体的な例をあげよう。これは、認識の問題ということに関して例外的に古くから指摘され研究が進んでいる事例であるが、たとえば、インディオが白人をどのように見たか、というものである（cf. ワシユテル1984：21/32；León-Portilla1956 etc.）。それは、征服という出来事を軍事力、作戦といったコンテクストの中だけで捉え、認識というコンテクストから独立させて考察したのでは歴史の本質が理解できないという好例でもある。よく言われるように、わずか200名足らずのスペイン人が、何万人ものインカ兵と対峙し、圧倒的少数にすぎなかった白人が、ほんの半日のうちにインカ王を逮捕し、その結果生じた混乱まで容易に鎮めてしまったという事実を例にとれば分かりやすいであろう。この特異な出来事については、これまであまたの歴史家

やエスノヒストリーの専門家が指摘してきた通り、見慣れぬ白人たちがインディオにとって神、あるいは神のように見えたという事実と深く結びついている。インディオのこの白人認識はその意味で、歴史を方向づけることになったし、また、この現象が極めて短期にしか意味をもたなかったとしても、よそ者をのちに「ピラコチャ」（「海の方から来た神」）と呼ぶという先住民の呼称慣行に関しても大きな影響を与えたことは否定のしようのない事実である。要するに、重要なことは、未知なるものをどのように把握し、それをいかに既知に変換し理解していくかという認識プロセスが歴史の細部まで影響を及ぼすということであり、そう考えれば、そこにいかなるメカニズムが働いているかという問題が、当面の課題として浮上してくるわけである。

もちろんスペイン人征服者とともに新大陸にもたらされたものは数多い³⁾。ここでは、そのすべてについて分析の手を広げる余裕はないので、とりあえず、アンデス先住民を震撼させた未知の動物、馬について彼らがそれをどのように受けとめたかだけにテーマを絞って考察することにする。承知のように、その動物は、リヤマやアルパカといった荷駄獣しか知らなかった先住民に、まずもって大きな衝撃を与えた家畜であることが知られており、十分とはいえないまでも一定量の民族誌学的データが散見でき、本稿の問題意識にとって極めて興味深い展開を示す事例を提供してくれるからである。ただし、初期のインパクトが後々までそのままの形で持続したわけではない。その家畜をめぐる観念は、ファーストコンタクトから接触の進捗につれて漸次変

化したからである。そこで本稿は、先住民がその見知らぬ大型獣と交流する中で、その動物についての見方や社会・文化内での意味づけ、認識がいかに変容したのかそのプロセスを考察することにする。先に指摘したように、先住民が、白人をいかに把握・認識したかについての論考——白い神と見做したか、人間であると考えたかという問題に収斂するが——は、短いながらも様々な形で公刊されているが、本稿で取り上げる馬に関しては、これまでほとんど研究がないといっても過言ではない。なるほど歴史学は、征服における馬の役割を戦術と絡めて興味深い解釈をいくつも提出している。しかし、軍事行動を離れた脈絡となると、馬への言及は恐ろしく貧弱なものになってしまう。他方、人類学は人間と家畜との関わり方、共生関係について共時的な相で詳細な研究の蓄積を始めている⁴⁾が、しかし馬への一般的な関心はもとより、家畜についての通時的分析への興味でさえ必ずしも大きいものとはいえない。要するに、人類学はもっぱら現在の問題を分析対象とする傾向にあり、歴史学（エスノヒストリーも含む）は、それよりもはるか昔の、つまり500年近く前の歴史的出来事に絡む脈絡の中でだけでそれを考察するにとどまり、結局、馬をめぐる両者の研究は、それぞれが別の方向にむき、しかも異なった時間的スケールで考察が進んできた結果、最終的には議論がかみ合う場すらないという状況にあるといわざるを得ない。したがって、両者をつなぐプロセスの研究は出てくるはずもなく、この点が一つの課題となって浮上する。そして、もう一点付け加えるとすれば、そのプロセス以前の、よ

り根源的な初期の認識についての考察もまだ手つかずの状態にあると言っておかなければならない。

馬はもともとインディオにとって未知の動物であったわけだが、後の論の展開を少し先取りすると、二つの世界が遭遇して間もない時期、先住民たちは、白人と同様に、馬からも圧倒的な威圧感を感じ、それに異常なまでの恐怖心を感じていた。この恐怖はいったい何に由来し、その感情は歴史に対してどのような意味を持っているのであろうか⁵⁾。ロサスは、ペルーではさまざまな局面で人々の間に広がった「恐怖」(miedo) が大きな歴史的意味を持つことがあったと指摘し (Rosas 2005 : 31-32)、恐怖心、歴史的心理学の研究の重要性⁶⁾を説き、——とはいえ、馬に関しての分析をしていないのは残念である——、その分野の研究が正当に行われてこなかったことを嘆いているが、本稿は、ロサスの意図したテーマを射程に入れながら、話を過度に広げないために、未知の馬を既知のものと認知し、それに意味を付与していくプロセスについて時系列的な見取り図を描くことを当面の課題としている。

2. 歴史の中の馬

2.1 史料

本論に入る前に資料について一言述べておく。馬に関する史料はまとまって刊行されてはいないし、クロニカ、地域報告書などの古文書に散発的に見いだせる言及を先人が整理してくれているわけでもない。残念ながら、管見に入った先行研究はなく、ここでは初めての試みとしてそれを提示するので、結果的には、資料の整理は、地理

的にも時系列的にもいまだ不十分かつ大雑把なものにとどまっている。本稿はとりあえず、目にとまった『インカ皇統記』(インカ・ガルシラーソ：1550～60年)、地域報告書(1550年～1600年)、『新しい記録と良き統治』(グアマン・ボマ：1600年代初頭)、『ペルーのトゥルヒーリョ』(マルティネス・コンパニオン(1800年)、南山大学人類学博物館所蔵のアンデス民族画像・友枝コレクション(1960年-現代)の資料を使って順に論を進める。ただし1600年以降は、特に視覚資料を用いることにより、歴史的に馬のありようをイメージとして現出させることができるよう工夫し、その点に関して実証的な考察をすることにする。なぜなら馬についての言及はあるにはあるが、それは単にその家畜の有無に関する証言にとどまることが多く、それがどのような形で人々の生活に組み込まれているかという描写にまで踏み込んでくれるものではないからである。したがって、馬が人々の生活の中でどのような形で利用されていたかということになると、あいにくそのイメージも引き出せないままに終わってしまう可能性が高い。そこで、本稿は、上記に提示した年代の図像・画像データを可能な限り活用し、視覚的にも生き生きとしたイメージを利用することに努め、馬の受容の歴史に関して少しでも「厚い記述」を引き出すようにしたい。筆者は別稿で馬をめぐる初期の認識とそれを支える民俗的思考論理を分析する予定であるが、本稿は、そのために、当面する問題を洗い出していくという予備的考察の意味ももつ。

2.2 征服の直前と直後

馬と先住民の出会いは、スペイン人に

とっては初めての経験ではなかった。彼らは、アンデス世界に入る前に、カリブ世界、メソアメリカで先住民が馬に示した反応を観察し、その存在が彼らにとってどのような意味を持つかを理解したうえで、その経験をアンデス世界の征服でも活かしたのである。その基になったと思われる古代メキシコ人の馬への反応は、先住民の証言が記すように、次のようなものであった。

＜鹿＞が背に人を乗せてやって来る。
(スペイン人は) 綿の詰まった胸当てをつけ、剣は、＜鹿＞の首に吊るしてある。この動物は鈴をつけられている。鈴は大きな音を出す。鈴は響きわたる。＜鹿＞はうなり、＜鹿＞は吠える。滝のような汗をかく。、泡が鼻面からポタリポタリと地面に落ちる。、、走ると蹄の音がする。パカパカと石が地面に落ちるような音がする。道は穴だらけになり、駆けた後にはそこいら中に蹄の跡が残る。走った後には地面にくっきりとめり込んだ跡が残る(レオン＝ポルティーヤ 1994：18)。

上記の引用で＜鹿＞と呼ばれているものは馬であるが、これは紛れもなくメシーカ(アステカ)人の馬への反応の一断面である。アンデス世界では、未知であった馬は＜リヤマ＞と呼ばれ、先住民はそれを身近な動物のカテゴリーに組み込み理解しようとしていたことが分かる⁷⁾。既存の動物に照らして馬を認識するという所作だけでなく、メシーカ人が馬に対して示した驚愕ぶりもアンデス人にはそのまま当てはまる事柄である⁸⁾。要するに、メシーカもインカも、馬へは同じ反応を示した——偶然だが

——わけだが、スペイン人は、先のアステカでの体験からノウハウを得て、それを実践するかのよう、「新大陸の先住民(＝インカ人)が驚く馬を彼らの目の前で疾走、急回転させ、その荒々しいいななきや鼻息で先住民を怯えさせている。また、スペイン人の指揮官は騎兵たちに騎馬戦をさせ、馬をインディオにわざと接近させ」(ペドロ・ピサロ 1984：55) 彼らに無言の圧力をかける奇策も実践している。

こうした作戦の根本には、馬に内在する攻撃的なイメージを利用しようとする意図がはっきりと窺えるが、他方、それはインディオの馬に対するイメージを過剰に刺激するものとなった。彼らは、スペイン人とはちがって、馬を人間——この場合はインディオ——の力をはるかに超えた、超自然的な存在と見做してしまった。インディオのこうした反応は、馬をめぐる語り(ロア)あるいは噂話にはっきりと表れている。彼らは、馬をケンタウルスのように、人馬一体、半人半獣と考え、不死身で口から火を放ちその尻尾で人間を真っ二つに切ってしまうと信じた(Guillén1974：150；ガルシラーソ 1986：450)。生き物の食べ物とはどうてい考えることのできない金銀を食し、それは足に銀を履いているとも語られた。スペイン人はこうした噂にさらに油を注ぐかのように、戦闘と馬との関係をことさら強調し「キリスト教徒(＝スペイン人)は、勇敢な人たちでひじょうに戦いに強い。風のように走る馬を持ち、それに乗った人たちは長い槍を持っていて、それでいくらでも人を殺す。なぜかという二飛びですぐ相手に追いつくからだ。馬も脚や口でたくさんの人を殺す。、、馬

の皮は硬いから君たちの槍では通らない」(ヘレス 1980: 484)などと「口撃」し、また別の脈絡では、馬の能力を神秘化するために「10騎もあれば(インディオを)全滅させられる」(ibid.: 491)などと妄言を吹聴して回った。確かに「馬は夜になると力を喪失する」という、その弱点を語るロアも聞かれたが、それにもかかわらず、その未知の動物への恐怖は人々の中に深く浸透することになる。

馬を神秘化する噂話は、それを担う先住民の馬への恐れを裏返し、言い換えれば代償反応の様式に他ならないが、そうした先入観が植え付けられたところに、あるいは、馬については何らの情報を持たない人々の前に馬がいきなり登場する。その動物とはじめて遭遇する者はその大きさ・俊敏さ・荒々しさに圧倒され、他方、語りや噂話で先入観を内面化させている先住民は噂話の影響を受けて恐怖心を倍加させ、その脅威がさらなる恐怖心を煽り、恐怖の悪循環に取り込まれていく。他方、スペイン人はスペイン人で実物の馬の力をこれ見よがしに誇示しインディオの恐怖心をあおりたてる。

スペイン人が馬に乗っている姿を目撃したインディオは、白人とその動物との共生関係を考えた。馬とスペイン人との結びつきは固く——実際先住民の中には人馬一体とさえ見る者もいた——その関係は排他的なので、スペイン人に敵対する者は馬にも対抗することになる。だから、スペイン人が馬に乗ってインディオにその馬をけしかけなくても、馬が彼らに近づくだけでひどく怯えることになる。彼らは、それが襲い掛かってくるのではないかと考えたからで

ある。馬は上背があり、騎兵であればなおのこと、相対する先住民を上から見下ろす格好になり、その威圧感はよりいっそう増す(Hemming 1970: 112)。

スペイン人にとっての馬は、それに跨る兵士に力とスピードをもたらす実質的な兵器というだけでなく、インディオの力を心理的に削いでしまう武器の一つとなったわけであるが⁹⁾、インディオにとっては、彼らを狼狽させ思考停止の状態にまで陥れる凶器ということになる。したがって、馬が現実には彼らを襲ったり、馬に乗ったスペイン人がインディオに急襲する以前、つまり、スペイン人との決戦の前に、馬との「戦闘」で実質的には勝負がついてしまっていたように見える。

本格的な合戦に入る前に、馬に対する恐怖をアンデス人に巧みに植え付けたスペイン人は、本番のアタワルパとの睨みあいにおいても、その手を緩めることはなかった。それどころか、その恐れをよりいっそう掻き立て増幅させる揺動作戦に出た。あらかじめアタワルパとの会見の場所を確認した後、どこからどの方向に馬を疾走させるか、どのような使い方をするかなど、事細かな戦略を練ったことがうかがえる。

「侯爵ドン・ファン・ピサロは、ペドロ・デ・カンディアに、2、3人の歩兵とともに、ラッパを持って、、小ファルコン砲を構えているよう命令した。そして、インディオがアタワルパにひきいられて全部広場にはいったら、大砲を発射し、、ラッパの音とともに、騎兵がわれ先にと大家屋からとび出してくる手筈だったのだ。広場に面した大きな入口がたくさんあった

から、騎兵が進撃するのに好都合だった。このようにして、すべての者が、ひとりの例外もなくその家屋の中にひそみ、どんな軍勢が待ちうけているのかインディオにさとられないよう、そして全員がドッと外に出て彼らを驚かせるようにはかったのである。インディオたちをこわがらせるため、馬にはすべて鈴付きのむながいをつけた」(ibid. : 56-57, 61)。

こうした作戦は、アンデスの先住民を驚かせるためだけにわざわざ編み出されたというのではなく、スペイン本国でも戦闘の折には同じような手法がとられることになっていたのであろう。しかし、少なくともそれまでに目撃したこともない大型獣が、奇妙な音や奇怪ないなきとともに突然目の前に現れ、それが前足で立ち上がりたり急回転しながら体すれすれの距離まで猛スピードで接近してくるのだから、馬を知らなかった先住民や噂で妄想を掻き立てられていたインディオにとってそれは、大きな衝撃を与えたにちがいない。

このように周到な準備を経ていよいよ王の拘束は実行に移される。「合図をすると、砲が発射され、それとともにラッパが鳴りひびいた。騎兵はいっせいにとび出し、砲の大音響とラッパとひしめき合う騎兵と鈴の音に、インディオたちは呆然となった。そこにエスパニア人たちが襲いかかり、殺戮をはじめたのである。インディオたちの驚愕はあまりにも大きかったので、逃げるにも門からではなく、広場をかこむ、壁の一区画を押し倒し」(ピサロ 1984 : 61)「互いに相手の上に登ろうとして将棋倒しになって死んだ。騎手はその

死体の山に登った」(Hemming 1970 : 42)。征服はあっけなく終了した。馬の軍事的機動力もさることながら、殺傷能力のある兵器を使わず、将棋倒しで相手を死なせたのであるから、馬を使った心理戦の勝利であった。

しかし、こうした揺動作戦で馬への恐怖を植え付けられはしたが、インディオは、その後の歴史的展開で、ただ守勢に回るだけではなかった。彼らは、はじめこそ馬に翻弄させられてはいたものの、それが白人が策もう軍事作戦のなかでは不可欠な要素であることをすぐに見抜いた。そこで先住民たちは、カハマルカからクスコへ囚われのアタウルパを伴って南進するスペイン人の動きを睨みながら、合戦の真の敵、彼らが排除すべき相手はスペイン人ではなく馬であり、馬さえいなければスペイン人に勝利できる、といわんばかりにその動物に照準を合わせ攻撃を仕掛けている¹⁰⁾。「馬狩り」の戦略は馬と一対一の勝負ではなく、むしろ馬の大きさ、俊敏さを逆手に取る作戦として練り上げられた。彼らの行きついた戦術、対抗策は、落とし穴であった。彼らはスペイン人が馬とともに現れそうな場所にそれを仕掛けた。陥穽には2種類あった。一つは、仕掛け穴の中に鋭く先の尖った杭を入れ、穴を木切れや土で隠しておき(Hemming1970 : 158)、罠にかかった馬を自らの体重で串刺しにしてしまおうというものである。もう一方は、馬の蹄が入るくらいの穴を馬の通り道にいくつも開けておき、そこを猛スピードで走り抜けようとする馬が穴に足をとられるのを待つという算段である(ibid. : 158)。馬の急所を足とみて、オンダ(投石器)でそれを狙う

のも重要な戦術であった (ibid. : 195)。オンダが馬脚に絡まり、それが倒れれば、騎手は放り出され、先住民が敵を倒す決定的なチャンスがそこで生み出されるからである。彼らの狙い目は、馬の脚を封じることで、そのスピード、機敏性、機動性を削いでしまおうというものであった。

彼らは、馬を殺すとその場に勝利の印としてこれ見よがしに花もしくは木の枝を置いた。これはスペイン人に対する先住民の力の誇示であった (ibid. : 112)。また、退治した馬の遺骸を持ち去ることは困難なため、頭と蹄だけを切り落とした (ibid. : 158)。馬具や蹄鉄の入手が目的であったのか、死体の解体で、死のダメ押しと勝利の誇示することを意図したものか、はたまた、馬を退治した者の勲章としてそれを先住民社会に持ち帰ろうとしたものなのか、その意味は不明である。ただ、理由はどうであれ、馬を狩ることは重要であり、スペイン人を襲う時には、スペイン人のみならず馬も必ず殺害しなければならないとされていた (ibid. : 260)。それどころか、10名のスペイン人を殺害するよりも1頭の馬を殺すことの方が意味があるとさえ考えられた (ibid. : 112) という。だとすれば、インカ皇帝の血を引くティトゥ・クシが「キリスト教徒を3人殺し、馬を1頭殺した」と供述する時、馬がただ単に人間と同格に並べられているというだけでなく、キリスト教徒3人どころかもっと大きな被害を与えたということを言おうとしていたと考えることができる。そしてこうした言い回しからすると、この段階ではもはや、馬と人間が一体であるという考え方はすたれていたということも窺える。

2.3 インカ・ガルシラーソの目撃したもの

インカ皇帝の血を引く皇女とスペイン人との間に生まれた混血のインカ・ガルシラーソは、1609-1617年にスペインで『インカ皇統記』を上梓しているが、彼は青年期前半まで過ごしたペルーでの日常を回顧しながら、彼自身が見聞した馬に関する興味深い記事を記している。彼のクロニカによれば、馬は戦闘と祭礼用にアンデス世界に持ち込まれたものであり、1554年頃にはまだ頭数も少なく、1万ペソ以上と高価であったが、1600年頃になると一挙に安くなり、駿馬でも300から400ペソに値下がりしている (ガルシラーソ 1986 : 449)。これは、戦闘の減少と、馬の繁殖が進んだ結果であり、それは同時に、馬が植民地社会の日常生活に浸透してきたことを示している。ところが、征服の混乱が終了し、馬は軍事的な役割を果たさなくなったあとも、それは、しばらくの間は先住民にとって恐怖の対象であったようである。インカ・ガルシラーソの記述は、若干長いがその生き生きとした描写はここで課題を考えるためには有用なので引用しておく。

「一般的に言って、インディオはウマに対して大変な恐怖心を抱いている。それゆえ、ウマが疾駆するのを見ると、彼らはどうしようもなく動転してしまい、そこがいかにも広い通りであっても、片側の家の壁に身を寄せて、ウマが通り過ぎるのを静かに待つということさえできない。すなわち、どこにいても、まるで未知の真ん中に寝そべっているのと同じように、ウマに踏みつぶされてしまうと思ひこむほど怯え、とり乱してしまうのである。また、彼らは、ウ

マが走ってくるのを目にすると、じっとしてはられず、自分ではウマから逃げるつもりで、二度も三度も道を横切る。つまり、こちら側の壁の傍にいと向かい側の方が安全に思われるが、向かい側に移ったとたん、また反対側の壁がより安全に思われるので、すぐに戻るというわけである。そして、かくも狼狽し、やみくもに動き回るものだから、ウマから逃れるはずが、自分の方からウマにぶつかるといった悲劇が何度も（現実に私も目撃したが）繰り返されることになった。、、、私がペルーにいた当時、インディオたちがウマに抱いた恐怖感はいくら強調してもしきれないほどである」（ガルシラーソ 1996：449-450）。

上記の引用で注目すべき点は数多いが、とりわけ本稿にとって以下の6点が重要である。1) これは、ガルシラーソがペルーで目撃しているわけであるから、少なくとも彼がスペインに渡った1560年までは見られた現象である。2) 戦闘や軍事的作戦という脈絡に限らず、単なる日常での馬との遭遇であれ、インディオは馬からの攻撃なしでも一方的に（あるいは無条件に）馬に極度な恐れを抱いてしまう。3) 彼らの恐怖は尋常ではなく、気が動転し、正しい判断がつかなくなるほどの思考停止の状態にまで達してしまう。4) 馬に対する恐怖心のもとでおこった事件は、一回ではなく繰り返されており、馬への衝突は単発的、偶発的出来事ではなく、一つの現象と考えなければならない。5) ガルシラーソが「一般的に」と述べることからして、この現象は特定の先住民に起きた現象というよりも、先住民全体に固有のものとして見做して

おかねばならない。6) ガルシラーソの書き方からすると、彼がスペインに渡り、クロニカを執筆する頃には、アンデス世界でも馬との接触の機会がふえ、時代が下るにつれて恐怖心は次第に和らいでいったように見える。

馬に危害を加えられなくても、馬の存在だけでそれに脅えてしまう「馬恐怖症」は少なくともガルシラーソがアンデスに滞在していた最後の時期（1560年）までは見られたが、では、この現象をいったいどのように考えたらよいであろうか。この点に関して当のインカ・ガルシラーソが解説を加えている。このクロニスタによれば、「新世界ではウマの目隠し革や、調教のために用いられる鼻鞍といったものが使用されていなかったのも、ウマがしきりに後足でたったり、飛び跳ねたりしたから」（ibid.：45）という。これは一見もっともなことで否定しようがない。確かに暴れ馬は人を寄せ付けず、それに近づこうとすれば誰もが恐怖を感じるものである。しかし、それは重要な指摘ではあるにしても、大切な事柄を見落としている。ここで問おうとしている恐怖は、ガルシラーソが考えている恐れとは少し質が異なる。ここで問題となるのは、スペイン人であれば何ら恐れることはない状況にあるのに、なぜインディオが動転するか、である。しかも、1560年代以降その恐怖感が薄れてくるということであれば、その年代以降、急に従順になったなどというありそうもないことを考えねばならず、ガルシラーソの見解をそのまま鵜呑みにして馬の不規則な行動を以てその原因のすべてとしてしまうわけにはいかない。しかも、先の引用部分ではイ

インディオが「暴れていない馬」にさえ狼狽している様子を描写しているのだからなおさらである。大切なのは、インディオの間に彼らが共有する、おとなしい馬に対しても怯えてしまう彼ら固有の集合的恐怖が存在したということであり、問題としなければならないのは、彼らの「馬恐怖症」である。

では、これは征服時のトラウマに由来するのであろうか。しかし、これは征服前、換言すればトラウマとなるような事件が生起する以前に、馬に遭遇した人々も同じく恐れを抱いたことを想起すれば、その説明も決して合点のいくものではない。しかも、これまた1560年以降にこの感情に変化の兆しが見えたり、後述するように、馬と積極的に関わろうとする先住民が出現するという事実を考えると、トラウマ説を受け入れインディオの恐怖心をそこに還元し一元的に片づけてしまうとすれば、それは歴史の本質をねじ曲げてしまうことになる。

このように考えると問題は、結局のところ、インディオが抱いていた恐怖の性質にかかっている。彼らだけが驚愕するという点に関してはすでに指摘したが、それは時代的に限定的であること、しかし、その脅迫的な心理は、その期間中どこでも同じ強度というわけではなく、漸次薄れていくという点が重要である。ガルシラーソの具体的記述を注意深く読むと、彼が「馬蹄職人はいない」と言いつつも、後にはその職人が現れ始めていることを記録している（ガルシラーソ1986：451）ことが分かる。これは、単に印象ではなく、具体的事例として例証できるといってよく、また当時の馬

の価格の下落の様子から推せば、馬の増加と逆比例する形で進行している。あるいは別の言い方をすれば、それは馬との遭遇・接触回数の頻度に規定されていると見することもできる。事実、もっと別の事例をあげるなら、スペイン人のもとで働くインディオは、早い時期から馬にブラシをかけて世話をしているのをガルシラーソ自身が目撃している。そうであれば、これは、未知なる馬に出会った者が、未知なるものに反応し、未知を既知に変換しそれに価値を付与していくというプロセスを表していると見ることが可能となる。このことは、端的に言えば、事物を捉え、それを認知し意味を生成していく文化プロセスが、社会に埋め込まれているということである。

ガルシラーソの記録によれば、そうした恐怖に引きずられる形で人々はまだ馬を嫌悪し、1560年代までは馬と関わる仕事をする者は一般的にはなかった（ibid.：449）という。しかし、こうした馬恐怖症は次第に克服され、その後は馬がインディオに社会・文化的に処理されてそこに別の意味を付与されることになる。馬を積極的に身近におこうとする先住民の誕生である。この時期に入ると戦闘の時代はほぼ幕を閉じ、馬の役割は、人や荷物を乗せて運ぶ輸送手段、さらには祭礼用に大きくシフトしてくる。ただし、それに騎乗するインディオはまだいない（ibid.：449）。とはいえ「（スペインから持ち込まれた要素のうち）役立つものは受容され、役立たないものは拒絶される」（Foster 1960：228）という単純な図式はここでは使えない。なぜなら先住民はスペイン人が馬に与えた上記の2つの役割とはかけ離れたものを創り出していくか

らである。馬は先住民に社会・文化的に理解され始めたことで、新たな価値を体現するものに変っていくのである。

(次号へ)

付記：本稿は2008年度南山大学パッへ研究奨励金I-A-2によりまとめられたものである。記して関係者各位にお礼申し上げます。

註

- 1) 本稿を読み進んでいけば分かることであるが、新大陸の先住民は、彼らの世界に突然侵入してきた人々、また彼らもたらしたものを、彼ら固有の既存の認識モデルに照らし、短期間で思考上のつじつま合わせをし、その未知なるものを理解し、意味を付与していかなければならなかった。他方、ヨーロッパから新大陸にやってきた白人は、新大陸を自在に動き回る機動力を手にしていたので、彼らは自らのそれまでの認識に合致しないものはそのまま放り出しておき、じっくり合うものが見つかるまで新大陸のなかを動き回るようになった。彼らがラテンアメリカのあちらこちらに繰り出した原動力の一部は、まさにこの点に求めなければならない。
- 2) ワシュテル(1984)の業績はアナー学派の問題意識をまさにアンデス世界で実践したものである。
- 3) インカ・ガルシラーソは『インカ皇統記』第9の書、第16章から第30章までを費やして、新大陸にヨーロッパから持ち込まれた動植物を一つ一つ丁寧に解説し、そがらが新大陸でどのよ

うな拡散、浸透の仕方をしているかを描写している。

- 4) 1960年にフォスターは「人類学者は、主に、家畜の小規模な飼育を研究してきた」のだが、「イSPANアメリカにおける家畜の研究を中心に位置付けてきたのではなかった」(Foster 1960: 70)と当時までの研究動向を回顧し、この分野の研究の不十分さを指摘している。アンデス世界では、土着の動物——ラクダ科——についての研究は多いが、ヨーロッパ産の動物については、フォスターが1960年に述べた状況といまだ大差ないのが現状である。
- 5) 興味深いことに、馬に示した恐怖感とは裏腹に、先住民は、牛に対しては恐れどころか異様なほどの親近感をおぼえているように見える。この点に関しては別稿を準備する予定である。
- 6) 歴史を動かす心理的要因は単に恐れだけとは言えない。たとえば、注5)で指摘した、牛への親近感は、実際恐怖心とは逆方向に向けられた感情である。歴史からことさら「恐怖」だけを引き出して分析するのではなく、喜怒哀楽を見とおす歴史学があってもよいと考える。
- 7) スペイン人は、リヤマを「羊」と呼び、彼らは彼らで未知の動物を身近な動物の範疇に押し込んで理解しようとしている。
- 8) 征服初期のスペイン人のたち振る舞いを観察すると、彼らはひょっとすると、アンデス人もメソアメリカ人も同じインディオとして十把一絡げに纏めて考えることができるとし、民族の差

など考慮せずに、メシーカもインカも同じ反応を示すと考えていたのかもしれない。

- 9) 逆に大勢のインカ兵に囲まれて不安がっているスペイン人にとっては馬は安心感をもたらすものであった。
- 10) 事実、馬を持たないスペイン人は、恐れるに足りない存在であると甘く見られていた (Hemming 1970 : 112)。これは、まだ白人を「神」であると考える者がいた時期——すべてではないにせよ——でのことであるから、ことは重大である。

参考文献

- 網野徹哉 2008 『インカとスペイン 帝国の交錯』講談社。
- Foster, George 1960 *Culture and Conquest—America's Spanish Heritage*, Viking Fund Publications in Anthropology No.27, New York.
- ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ、インカ (牛島信明 訳) 1986 『インカ皇統記 二』岩波書店、東京。

Guillén Guillén, edmundo 1974 *Visión Inca de la Conquista*, Lima.

Hemming, John 1970 *The Conquest of the Incas*, Macmillan, New York.

ヘレス、デ・フランシスコ (増田義郎 訳) 1980 「ペルーおよびクスコ地方 征服に関する真実の報告」『征服者と新世界』pp.435-556、岩波書店。

León Portilla, Miguel 1956 *La filosofía náhuatl estudiada en sus fuentes*, SEP, México D.F.

レオン＝ポルティエーヤ、ミゲル (山崎真次 訳) 1994 『インディオの挽歌』成文堂、東京。

ピサロ、ペドロ (増田義郎 訳) 1984 「ピルー王国の発見と征服」『ペルー王国史』pp.1-304、岩波書店。

Rosas Lauro, Claudia 2005 *El miedo en el Perú, Siglos XVI al XX*, Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

ワシュテル、ナタン (小池祐二 訳) 1984 『敗者の想像力——インディオのみた新世界征服』、岩波書店。

(南山大学外国語学部教授)

Equinophobia among the Indigenous People of the Andes (1)

KATO Takahiro

There are a large number of studies on the Spanish conquest of the Inca Empire. Many of them concentrate on the process and consequences of the event by focusing on politics, economy, society and/or religion. Another aspect, however, focusing on the cognitive system of the people concerned, may be adopted, since when the conquest occurred, both sides of people, knowing nothing about each other, must have had specific feelings or thinking at the first stage of the conquest. It seems therefore important to consider logics of thinking in historical studies.

In the first part of the serial article, I make a preparatory investigation of the 'equinophobia' among the indigenous people of the Andes, which can be found in ethnohistorical sources. Since there seems no single study on the subject at the point, and since there exists no full edition of historical documents specifically interested in horses, this article would be the first attempt to investigate the ethnographical history of the same subject.

Horse was an animal unknown to the people of the Andes at the first stage of the conquest. Before their coming to the Andean world, horses had already been introduced both in Caribbean region and in Central America, and people living there were apparently terrified with them. Conquerors realized that the fear of horse among the indigenous Mexican people could be used in their project, and they actually did so. Following the conquest of the Aztecs, the conquerors tried to use horses for the same purpose in the Andes.

The fear of horse among the people of the Andes continued even after the conquest itself had been completed. Such feelings disappeared or changed from around 1560 onward, and such phenomena seem to be a focus of this article.

民族誌¹⁾ではないもう一つの方法

サガヤラージ・アントニサーミ

はじめに

昨年の夏の8月22日から9月4日までの2週間、南山大学人類文化学科は24名の学生と共にインド、タミルナードゥ州マドゥライ地区にあるヴァディパティ村においてフィールドワーク調査を行った。われわれは滞在期間中、主に村にある神言会²⁾の施設の宿舎に宿泊し、朝から夕方まで複数のグループに分かれて村内を周り村の人々への聞き取り及び観察などによる調査を行った。またこのような調査の際には、現地の Loyola 大学³⁾に所属する10名の大学院生から様々な面で協力していただいた。彼らとの共同作業は学生たちにとってもお互いに良い経験になったと考えている。

今回南山大学人類学博物館にて開催させていただいた写真展は、このようなフィールドワークの成果をより多くの人々に見ていただき、人類学的なフィールドワークという手法、そして展示品を通じての異文化の理解を深めてもらいたいということを意図して発案された。以下では人類学におけるフィールドワークという手法について、そしてインドフィールドワークの概要、またその成果を大学の博物館で発表することの意義などについて述べていきたいと考えている。

1. 人類学におけるフィールドワークという手法

フィールドワークは人類学に限らず、社会学や心理学においても調査方法の手法として確立されている。そこでは「住み込み調査」あるいは参与観察以外にも、アンケートやインタビューなどの技法が用いられている(佐藤 1992:51)。それぞれの分野によってその方向性や視点の差異など違いはあるが、フィールドワークという手法の基本的な要素は共通している。つまり、フィールド(現場)に調査者自らが足を運び、目で見、耳で聞き、肌で感じたことをデータとして蓄積していくということである。

フィールドワークの現場は、現在海外、国内を問わず様々な地域が対象とされている。南山大学人類文化学科でも2000年から継続して愛知県、静岡県、長野県の山間部と沖縄で学外授業としてフィールドワークを行ってきた。そして今回のような学科としての海外での人類学的なフィールドワークは、人類文化学科にとっては2005年の韓国でのフィールドワークに続く2回目の試みであった。

このような海外でのフィールドワークは空間的・時間的に多様な人間の文化、思想、言語について多角的に学ぶという点において大変有意義なものである。今後もこのような企画を学科として継続的に行っていく予定であるので、そのステップとなる

今回のフィールドワークの位置づけは重要なものであると考えている。

2. インドフィールドワーク概要

今回調査を行ったのは、前述のように南インド、タミルナード州の南部に位置するヴァディパティ村である。人口は約2万人で村としての規模はかなり大きく、近郊の中核都市であるマドゥライまでは車で約1時間を要する。村の中心部には国道が走り、その脇には多くの商店や市場が並んでいる。

インドは多民族、多言語、多宗教の国家であり、それに加えてカースト制度⁴⁾の存在が社会的構造をより複雑なものとしている。インドにおける村落の社会的構造については様々な先行研究があるが、その代表的なものとしてはベティによる村落の社会構造と地理的状況の分析が挙げられる。寺や教会、主要な通りや火葬場などと、住居との物理的な地理関係は、カーストを中心とする生業の社会的構造と密接な関係にあることがそこで述べられている (Beteille 1965: 43-44)。つまり村の中心部には高位カーストの身分の人々が居住し、逆に中心部から離れば離れるほど低位カーストの身分の人々が生活しているということである。そしてこのような村落社会の中で支配的な地位を保持するカーストはドミナントカーストと呼ばれ、彼らがその中心部に位置する人々である。ドミナントカーストとはある村において人口、政治、経済的力、儀礼的地位、教育の水準、職業という要素すべてにおいて優位な位置のカーストである。ここでいうドミナントカーストのカーストとはジャーティを意味する。そして

ジャーティは実際の現場で目にするフィールドの視点であり、ヴァルナはマナ法典に基づいた文献的な視点であるという違いも指摘されている (Srinivas 1989: 5-6)。

フィールドワークに参加する学生たちはまず春学期をその準備期間とし、人類学的なフィールドワークやインド、そして調査地の基礎的な知識を学んだ。そしてその中で生まれた各自の問題意識をまとめ、それに関する先行研究を収集した。その後、8月から9月にかけて現地で調査を行い、そこで得たデータをもとに、再び先行研究や方法論などと照らし合わせながら、それぞれテーマについての報告書を書きあげるまでが課外授業としてのフィールドワークの一連の活動である。

インドでは、同州のヴェランカニ⁵⁾に存在する健康のマリア教会 (Our Lady of Good Health) を始めとして、聖母マリア信仰とそれにまつわる祝祭が様々な地域で行われている。調査を行ったヴァディパティ村の教会でも、あるヒンドゥー教の僧侶によって聖母マリアの啓示がもたらされたとされ、それに伴う奇跡などによって、この場所が新たな巡礼地としてにわかに脚光を浴び始めている。そしてこの教会でも行われている聖母マリアの祝祭は、より大規模に行われるようになり、大勢の人々が全国から集まってくるようになった。

今回の調査ではこのような祝祭の様子を観察するとともに、それ以外にも村の現状を把握し、村に起こった近年の社会変動についての情報を集めることを目的とした。またそれを中心に、服飾、芸能、経済、娯楽、教育、食、結婚、などについて幅広く、ヴァディパティ村の状況についての情

報の収集及び観察を行った。

3. 研究の発表の場としての博物館

フィールドワークを行うということは、同時にその成果をより多くの人々に知ってもらい、調査をより公のものにする必要があるということでもあると考えている。民族誌は人類学においてフィールドワークの成果を発表する一般的な方法であり、南山大学の授業の一環として行われてきたフィールドワークでも、参加したそれぞれの学生によって報告書が制作されてきたが、今回はそれに加えて南山大学人類学博物館にて写真展を開催した。

その理由は第一に、冒頭でも述べたようにフィールドワークをすることによって得られた成果を、より多くの人に共有したいということである。

写真や展示品などは視覚的にも見る人に訴えるものが強く、報告書などの文章化された情報に比べて、より一般的に共有することができるという利点がある。また映像の持つ多義性とそれを研究資料以外の形で再利用することについて木田が述べているように、写真というメディアは、研究者が報告書や民族誌によって読み手に意図的に伝えるもの以外の情報を内包しており、そのことによって見る人それぞれが異なる豊かな解釈をすることを可能にしている（木田 2008：15-16）。

そしてこのような成果を博物館という場を借りて発表することで、学科や学部、もしくは学内や学外といった敷居を越えて、博物館を訪れるすべての人々に共有することができると思ったことも理由の一つである。特に報告書などに触れる機会の少ない

学外の方々や他学部、学科の学生に、博物館のように気軽に立ち寄れる場所で、今回行ったフィールドワークについて紹介する機会を提供できたことは有意義なことであったと考えている。

今後とも積極的にフィールドワークの活動を広め、異文化理解のきっかけとしてより多くの人々に受け取ってもらえるよう、博物館をはじめ、様々な場面においてこのような発表の機会を設けていきたいと考えている。

謝辞

今回の写真展は初めての試みでもあり不慣れなことも多く、南山大学人類学博物館の関係者の方々には大変お世話になりました。この場をお借りして謝辞を申し上げます。

註

- 1) 人類学において民族誌と言った場合は、その対象についてフィールドワークという方法を使って調べた研究、もしくはその調査の成果として書かれた報告書を意味する（佐藤 1992：40-45）。
- 2) インドや日本を含め世界の 70 カ国に拠点を拠点に活動している国際的な修道会であり、南山大学の母体でもある。
- 3) タミルナードゥ州の州都チェンナイ市にある大学。上智大学と同じくイエズス会を母体としている。
- 4) カースト（caste 19 世紀までの英語綴りは、cast）ポルトガルの航海者が、インドとその途上で目にした社会慣行

にたいして与えたカスタ casta に由来。血筋・人種・種を意味し、ラテン語のカストゥース（混ざってはならないもの、純血）に起源をもつ。16世紀末以降、インドに限定されて使われるようになった。カースト制度にはヴァルナとジャーティの2つの区分がある。ヴァルナはバラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラの4つの階級からなる区分であり、ジャーティとは生業からなる職業集団の区分である。

（藤井2007：1-7）。

- 5) ベンガル湾に面したタミルナードゥ州東部にある村落。州都チェンナイからは南方に約350kmに位置する。

参考文献

木田 歩 2008 「博物館における映像資料の可能性—特別展『フィールドの記憶—生

誕100年人類学者沼沢喜市のニューギニア調査写真から—』を振り返って—』『南山大学人類学博物館紀要』26：11-18

佐藤 郁哉 1992 『フィールドワーク』新曜社。

須藤 健一 1996 『フィールドワークを歩く』嵯峨野書院。

藤井 毅 2007 『インド社会とカースト』山川出版社。

山田 勇 1996 『フィールドワーク最前線』弘文堂。

Srinivas, M.N. 1989 *The Cohesive Role of Sanskritization and Other Essays*. Oxford University Press.

Beteille, Andre 1965 *Caste, Class, and Power: Changing Patterns of Stratification in a Tanjore Village*. University of California Press.

（南山大学人文学部講師）

Another Way of Understanding Different Cultures: Possibility of Visual Materials

SAGAYARAJ A.

This brief report gives an overview of our fieldwork in India, and points out the possibility of visual materials to introduce anthropological studies.

From August 22 to September 4, 2008, twenty-four students of the Department of Anthropology and Philosophy at Nanzan University and I carried out a fieldwork in a village located in Tamil Nadu, India. On this occasion we observed not only the festival of the Virgin Mary which became popular in this region, but also some changes of the society, which have occurred in the village these years.

Following the fieldwork, we had a chance to exhibit photographs taken in the field at the Anthropological Museum of Nanzan University. Unlike written materials (monographs, etc.) from which readers may understand what the authors intended to describe, visual materials are rather open to free perception, and it can be suggested that this type of representation would become more useful for understanding different cultures.









中央アンデスの物質文化の歴史的連続性／非連続性

—友枝啓泰アンデス民族学画像コレクションに見られる農具の分析を中心に—

河邊 真次

はじめに

すでに前号までに繰り返し述べているように、南山大学人類学博物館に寄贈された「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」(以下、友枝コレクション)は、アンデス文化人類学研究の第一人者である友枝啓泰氏(以下、寄贈者)が40年以上にわたる研究歴の中で撮り貯めた4万点を越える写真資料群であり、そこに収められたアンデス地域の諸民族およびその生活・習慣は、視覚的民族誌資料として第一級の学術的価値を有する。われわれ友枝コレクション調査班(以下、調査班)は、この貴重な画像資料群をより簡便に利用できるようデジタル化するとともに、視覚的民族資料データベースを構築する基盤作りに携わってきている¹⁾。その三年目に当たる本年度も、関係各位の協力のもと日々デジタル化作業は継続しており、データも順調に蓄積してきている。また、昨年度より試験的に開始した南山大学人類学博物館ホームページ(以下、博物館 Web)上での画像資料の公開に関しても、当初の見込みを超える訪問／閲覧回数を記録し、友枝コレクションに対する内外の関心の高さを裏づけている。こうした Web 上でのデータ公開については、解決すべき問題点は多数残されているものの、当該コレクションをより広く周知するとともに、希望者に対して参照しやすくする上で極めて都合のよい仕掛けで

あるといえよう。

他方、友枝コレクションの学術的価値については、実際にこれらの民族誌画像資料を利用した研究を通じてはじめて明らかになるであろうし、またそれは、撮影時の寄贈者の関心とは異なる、第三者による新たなアンデス研究の糸口を開くものともなろう。例えば、寄贈者が最も精力的に現地調査を実施したと思われる1970年代から1980年代には、コレクション中でも最も多くの画像資料が残されており、アンデス農牧民の生き生きとした生活実態が見取れる。とりわけ、物質から文化を研究することに重きを置く博物館の立場に鑑みれば、アンデス農牧民社会の物質文化研究に資する資料として、当コレクションが有効利用できることは言を待たない。

そこで本稿は二つの目的をもつ。第一に、現在進行中の友枝コレクション・データベース化作業の進捗状況を報告するとともに、Web 上で公開した民族誌画像資料に対する一般の関心の度合いを、実際の解析データから分析すること。第二に、デジタル化済みの民族誌画像資料を利用した学術的活用の可能性を示すことである。この二つの目的を達成するために、本稿は二部構成として議論を進めるが、まずは前者の目的、すなわち友枝コレクションのデータベースの現状報告から話をはじめていきたい。

Ⅰ. 友枝コレクションのデジタル・データベース化進捗状況報告

1. 2008年度作業計画と進捗状況

2006年度より始まったデジタル・データベース化計画も三年目に入り、当初予定通り順調にデータの蓄積が進んでいる。すでに報じているように、本計画では、4万点以上の総資料点数に及ぶ友枝コレクションの画像資料群を5ヵ年でデジタル化するものであり、各年度の処理点数として、全体量のおよそ20%に相当する8,000点のデジタル画像および書誌データを順次作成することを数値目標としている。この目標値に対して、2006年度には劣化の著しい6cm×6cm ブローニーフィルム約600点を含む8,000点、また2007年度にも同約400点を含む8,000点の画像資料のデジタル化が完了し、計画値どおりの成果をあげてきている。

2008年度についても、過去二年と同数の画像資料のデジタル化を達成すべく作業に着手しており、調査班メンバーの精力的な作業従事にも恵まれ、本稿執筆時点（2009年1月末日）では目標値の75%に相当するおよそ6,000点のデジタル画像の作成に到達しており、昨年度までの作業ペースに鑑みれば、年度内の目標値達成は確実にところまで来ていると言えよう。その一方で、書誌データに関しては、従来寄贈者への綿密な確認作業を行いながら進めてきているのであるが、今年度はこの作業が期待通り進んでおらず、画像データの作成にやや遅れているのが現状である。したがって、本年度の残りの期間は書誌データの拡充が最優先課題となってくるものと考えている。

なお、本年度から新たに開始した試みと

して、これまで蓄積した画像資料をより簡便に概覧するための画像目録を作成するというものがある。前述したとおり、過去二年間ですでに16,000点以上の画像資料のデジタル化が完了してはいるものの、その全容を瞬時に把握し、参照したい画像の所在を知るためには、従来はパソコンを立ち上げ、ハードディスクに保存されている画像データを個別に検索していく方法しかなく、作業を進める上でも、また希望者に友枝コレクションの概要を紹介する上でも不便さを感じていた。加えて、書誌データに関する寄贈者との打ち合わせの際にも、具体的な画像を、その前後に撮影された画像との関連も踏まえながら説明いただく必要性に迫られることが多く、ディスプレイ上の画像データのみでは作業がはかどらないという事態も数多く発生した。そこで、これらの問題点を解決すべく、デジタル化が完了した画像データを、その資料番号とともに紙媒体にプリントし、アナログ的に検索ができるような画像目録を作成することとしたのである。

具体的には、友枝コレクションの原資料を納めたシート単位（すなわち、撮影時のフィルム単位）で画像データをB4サイズの印画紙に印刷し、それらを撮影年毎にクリアファイルに入れて保管するというもので、使用者が撮影年に応じてコレクションを参照しやすい形をとっている。また、これらのクリアファイルには撮影年を背表紙につけて分類するのみならず、一冊のクリアファイルに綴じられた画像資料群に、原資料が収められたファイル番号に準じてインデックスを付記するといった工夫を施している。この目録の作成により、一方では

デジタル化済みの画像資料の所在とその撮影内容を容易に視覚化することができ、作業効率の向上につながっただけでなく、他方では、これまで散発的にしか実施できなかった寄贈者への書誌データの確認作業も、本目録を送付することで恒常化・効率化することが期待できるようになったのである。とはいえ、この目録作成は作業の効率化の一環として試験的に実施しているものであり、資料番号の採番方法、運用基準等、今後さらに検討すべき点も多く、次年度以降の課題の一つとしていきたい。

2. 人類学博物館 Web でのデジタル画像の公開

すでに前号でも述べたように、本計画では Web 上でのデータベース公開を計画の柱の一つに据えており、また、人類学博物館内部における画像資料の運用および将来的な画像資料アーカイブズ構築をも視野に入れて進めている [河邊 2008 : 35-36]。その一方で、アンデスに関心をもつ人々が友枝コレクションをより広く利用できるようなシステム展開も必要であると考えており、その具体策の一つとして、2007年8月21日より人類学博物館 Web 上の「館蔵品ギャラリー」内に、「アンデス民族画像コレクション」のコーナーを設置した。これによって、インターネットを利用したデータ公開を開始し、画像データの一部を閲覧可能とした [http://www.nanzan-u.ac.jp/MUSEUM/gallery/index.html]。

残念なことに、本年度は諸事情により画像群を新規に更新することはできなかったが、2008年3月4日付けで更新した展示画像の詳細を添付表-1 および図版 01-03

に示す。なお、データ公開に際しては、初回公開時と同様、次の二点に留意した。つまり、① Web 上での運用を容易にするために軽量化した画像を新規に準備する、② 海外からのアクセスを考慮して当コレクションの概要及び各画像資料の書誌データには英語による表記を付すというものである [ibid. : 37]。さらに、昨年度のデータ公開開始後、この「館蔵品ギャラリー」に対するアクセス解析を半年に一度の頻度で定期的実施し、友枝コレクションに関する反響を確認することとしている。本稿執筆時点の最新の解析は終了していないが、2008年度上半期（2008年4月1日から9月30日まで）のビュー数は2,416件（月平均403件）と、年間での利用件数見込み2,000件を大きく上回るペースで堅調に推移している。詳細は添付表-2を参照いただきたいが、注目に値するのは、海外からのアクセスが件数、割合ともに大きく伸びているという点である。前号でも紹介したように、友枝コレクションの広報活動に関しては、さまざまな方法で国内外を問わず広く行なってきたおり、このアクセス解析が示す数値は、まさにこの広報活動の成果の一端を示すものと考えていいだろう。同時に、友枝コレクションに対する関心の高まりを示す一つの指標となることも自明である。なお、現在、第三回目の画像データ更新に向け鋭意準備を進めており、本年度末には公開予定である。加えて、今後公開データを定期的かつ継続的に更新し、「館蔵品ギャラリー」をさらに充実させるとともに、将来的にはより利用しやすく機能的な展示方法を模索すべく、関係各所との連携をとりつつ友枝コレクション利用

の簡便化を図っていきたいと考えるのである。

II. 民族誌画像資料にみる農具の歴史的連続性／非連続性—友枝コレクションと年代記記述との対比を中心に—

前々号の拙論において、友枝コレクションに収められた民族誌画像資料を利用した学術研究の可能性の一端を、アンデス民衆芸術「サルワの板絵」のモチーフとの比較から示すことを試みた〔河邊 2007：34-40〕。前述のように、4万点を超える規模を誇る友枝コレクションは、一流の文化人類学研究者が40年以上に及ぶ研究と長期にわたる現地調査の中で撮り貯めた、現地の人々の生き生きとした生活を克明に記録する稀有な視覚的民族誌であり、世界各地に断片的に保管されている他の画像コレクションに勝るとも劣らない貴重な資料群であるといえよう。

ところで、三年間に渡るこの友枝コレクションのデジタル化に携わることで、作業関係者は各々、写真に収められた中央アンデスの文化的側面に触れながら、さまざまな問題意識を持つようになってきている。すでに繰り返し強調してきているように、当該コレクションはアンデスに住む諸民族の生活風景や習慣を同時代的に撮影した画像資料群であるため、これらの資料から、撮影者たる寄贈者自身の関心や視点とは別の、新たな無数の研究テーマを第三者が発見することも自明である〔加藤・河邊 2006：32〕。そこで本節では、寄贈者をもっとも集中的な現地調査を行い、画像資料の質量ともに豊富な1970年代から1980年代の20年間に注目し、その中に数多く

見出されるアンデス高地農牧民の農具をとりあげ、16世紀以降植民地時代を通じたそれら物質文化の連続性と非連続性を、年代記の図像資料等との比較から若干の分析を試みるものである。本テーマは、筆者が当該コレクションのデジタル化作業を通じて持ち得た問題意識の一つであり、その分析を通じて、アンデスの伝統文化と外来のヨーロッパ文化の「結晶化」〔Foster 1962〕の度合いを、中央アンデスの事例から検証するものである。なお、本テーマを進めるに当たり、使用する民族誌資料は前述の時期の画像データに依拠するために、最新の農具事情および利用状況には言及できないこと、また、筆者自身が現代中央アンデスの物質文化の分類・体系化に従事した経験がないために、本論はあくまでも図像研究の一試論として分析を進めざるを得ないことは、あらかじめお断りしておきたい。

1. 中央アンデスの農牧業をとりまく環境

はじめに、中央アンデス高地農牧民の農業の特徴を略述しよう。周知のように、アンデス山脈は南米大陸の太平洋岸に沿って南北に約8千キロにわたって走る地球上で最長の大山脈である。そのアンデス山脈の中央部に当たる南緯4度から20度にかけての地域を中央アンデスと呼び、そこにはペルーとボリビアが位置している。本節で扱う中央アンデスの農具も、このペルーとボリビアの農牧民が使用するものを中心的に扱う。

ところで、中央アンデスは太平洋岸の低地から6,000mを超える山岳地帯まで非常に多様な高度域が存在しており、各々の高度によって複雑な環境が現出する²⁾。この

ような環境上の多様性が、中央アンデスの生業の多様化を生み出す一因となっており、その栽培植物の種類豊富さから、当該地域は世界の作物の6大センターの一つに数えられている³⁾。とりわけ、中央アンデスでは古くから、4,000m 付近の寒冷高地におけるジャガイモやオカ (oca)、オユコ (olluco) などの根茎類栽培と、作物栽培不可能な 5,000m 近くで家畜化に成功したリヤマとアルパカの牧畜により、5,000m に及ぶ高度域を人間の生活領域とすることを可能としてきたのである。

このことに加え、16 世紀以降に行われたスペイン人による征服事業に伴い、アメリカ大陸には存在しなかったウシ、ウマ、ヒツジなどの家畜動物やコムギなどの旧大陸の栽培植物が導入されたことで、この中央アンデスの農牧業はさらに多様化することとなった。無論、ヨーロッパから導入されたものは、家畜動物や栽培植物だけではない。農具や織機などの物質文化、さらには迷信や占いなどの農耕上の慣行も付随していたのである [Foster, 1962 : 114-116]。言い換えれば、征服期を境にして、中央アンデスの農牧業を取り巻く諸環境は大きく変容したということになるだろう。

このように、アメリカ大陸の生業に対するスペインからの影響は決して小さなものではなかったが、農牧業に関しては、外来の要素との接触を経験したとはいえ、あらゆる土着の要素が放棄されたり変容したわけでは決してなかった。また、スペインから持ち込まれた要素も、一様な「征服者側の文化」であったわけではなく、スペイン各地に見られる多様性がそれを担う各地方の出身者によって意識的・無意識的に持ち

込まれたのであり、それに接触した被征服者側も、自らの生活環境あるいは生活様式に適した要素のみを採用したことは想像に難くない。植民地期以降のイスパノアメリカにおけるこうした民衆レベルでの文化要素の受容・混淆・定着を、ジョージ・フォスター (George Foster) は「文化の結晶化 (cultural crystallization)」と呼び、その過程を次のように簡潔に述べている。

新しい植民地文化の基本的な輪郭はすばやく形成された。それが比較的統合され、植民者のより緊急性の高い諸問題に予備的な解決を提供した後、その型はより堅固なものとなった。つまり結晶化されたといえよう。

結晶化の後、そして社会環境や自然環境に合理的な満足が得られるよう調整する期間の間、新たなイスパノアメリカの植民地文化は、継続的なスペインの影響にたいしてより強く抵抗するようになった。安定化途上にあつたこれらの文化は、それゆえ、変化を受容することも、また、初期の頃に捨て去ったり拒絶したりした新しい要素を直系の文化 (= スペイン文化) から受け取るといった傾向もほとんど示さなかったのである [Foster, 1962 : 399、カッコ内は引用者による補足]。

このような視座に立ち、フォスターは農具を含む農業慣行についてもその著書の中で一章を割き、イスパノアメリカとスペインとの比較を行っているが、残念ことに、先住民地域での「結晶化」については触れていない [ibid. : 50-51]。つまり、彼の

「結晶化」の分析は、主に非先住民地域に見られる農業慣行に限定されているのである。そうであれば、本節の焦点である中央アンデスの農牧民の農具に関する研究の試みは、一方では当該地方のインディオ農牧民の農業実践のあり方を整理し、他方ではフォスターの提唱した「文化の結晶化」の概念をインディオ農牧民社会に敷衍し、その適用可能性を探るという点において重要な意味をもつと言えよう。このような問題意識に立ち、次項において中央アンデスの具体的な農具をとりあげ、その歴史的連続性／非連続性について若干の分析を進めていく。なお、紙幅の関係上、中央アンデスに分布する全ての農具を扱うことは困難であるため、以下の分析ではいくつかの代表的な農具のみ分析対象とする。

2. 中央アンデスの農具

(1) 手鋤 (cuya)

はじめに、中央アンデスで最も広く見られる農具の一つ、手鋤について見ていこう。まずは図版 04 の図像-1 および図像-2 をご覧いただきたい。これらの図像は、17 世紀初頭に植民地初期のペルー人の生活を記録した年代記作者グアマン・ポマ (Felipe Guamán Poma de Ayala) の描いた挿絵である⁴⁾。これらの図像には、植民地初期のトウモロコシ農耕の風景が描かれているが、図像中の農業従事者の手に握られているのが手鋤である。この農具は、植民地初期の農民の間で使われていたもので、図像から判断する限り、トウモロコシ栽培の場面で使用されていることが分かる。また図像-3 は、クスコ市の博物館で撮影された手鋤の展示品であるが、この実

物写真からもわかるように、畑を耕起するための刃先は木製で、同じく木で作られた柄に縛りつけられている。図像-3 の手鋤の製作および使用年代については不明であるが、少なくとも植民地時代初期にはこの手鋤が中央アンデスで使用されていたことがこれらの図像から推測できよう。

続いて、図像-4 および図像-5 に移ろう。この 2 点の図像は、18 世紀にペルー北部の海岸地方トルヒーヨ (Trujillo) の人々の生活を色彩画で描写したコンパニオン (Martínez Compañón) の画集からの引用である。これらの図像にも、農民の手に握られた手鋤が見られるのであるが、前述の図像とは異なり、刃先が金属製になっていることが見てとれる。周知のように、先スペイン期アメリカ大陸では鉄器は使用されておらず、植民地期以降にスペイン人によって導入された金属加工技術である。そのため、前述の植民地初期の農具には鉄ではなく木または石片の刃が使用されていた。しかしながら、18 世紀になると鉄器は民衆レベルにまで普及し、農具として使用されていたことがこれらの図像からも明らかとなるのである。

さらに、現代の手鋤を図像-6 に示す。これは 1981 年にアプリアマック県アンタバ (Antabanba) で撮影された手鋤であるが、前述の図像群と比べてその形状に若干の違いが認められるものの、その基本構造および利用方法 (図像-7 および図像-8) はほぼ同じと見てよい。総括すれば、スペインから導入された鉄器技術が刃先に利用されるようになったとはいえ、中央アンデスに現代も見られる手鋤は、先スペイン期からその形状および用途に大きな変化

を受けることなく引き継がれてきた農具の一つと言えるだろう。なお、中央アンデス北部山岳地域に位置するカハマルカ地方（Cajamarca）の農具を紹介する冊子の中で、この手鋤は「除草や、ジャガイモ、オユコ、オカの掘り取りに使われる」道具として列挙されている〔ASPADERUC, 1989 : 37〕。

(2) 踏み鋤（チャキタクリヤ、chaquitaqlla）

次に、中央アンデス高地、とりわけペルー中部から南部にかけて広く見られる農具、踏み鋤を見てみよう。前述の手鋤と同様、この踏み鋤に関してもグアマン・ポマの挿絵の中に数多く登場する。図版 05 の上段に挙げた 3 つの図像（図像-9、10、11）は、いずれもグアマン・ポマの挿絵からの踏み鋤の抜粋であるが、これら 3 つの図像はそれぞれ踏み鋤が使われる状況に違いが見られる。図像-9 は、インカ時代よりもさらに古くさかのぼるアンデスの第一世代の人類であるワリ・ウイラコチャ（Uari Uiracocha）を描いた、グアマン・ポマによる想像の絵である。このことは、登場人物が身につける衣服が、木の葉で作られていることから分かるように、高文化であったインカ期以前の「未開」の世界を表したものであるが、この時代の農耕ですでに踏み鋤が使われていたと想像されるほど、踏み鋤はグアマン・ポマのメンタリテイに深く刻み込まれた伝統的農具であったともいえよう。また、図像-10 は、インカ時代の踏み鋤を使った協働の一場面であるが、この図像の左端にはインカそのものが描かれており、この時代、農耕が神聖な儀礼としての側面を持っていたことが読み取れる。同様に、図像-11 も踏み鋤で畑に

種をまく場面の描写であるが、他の図像と同様、当時の農耕における男女の分業を明白に表現しているといえよう。

踏み鋤の形態的特徴は、主に次の三点によって表される。つまり、①土を掘り起こすために柄そのものの上部が湾曲、あるいは柄に湾曲した継ぎ柄を取りつける、②柄の下部に踏み込み用の横木を取りつける、③先端部は地面に突き立てやすいよう尖らせるか、あるいは金属製の刃先が撮りつけられる、の三点である。地域によって若干のバリエーションは存在するものの、この三つの特徴はグアマン・ポマの挿絵も、現代の踏み鋤も共有していることが図像からも明白である。ちなみに、図像-12 は前述のクスコ市の博物館の展示品、図像-13 は 1981 年にアプリマック県コタバンプラス（Cotabambas）の農家で撮影されたもの、そして図像-14 は隣国ボリビアの高地村落アマレテ（Amarete）で撮影された踏み鋤である。

また、図像-15 および 16 では、現代の踏み鋤の使用方法を紹介する画像資料であるが、図像-15 はジャガイモの掘り取り、図像-16 はジャガイモの植えつけの光景である。いずれの画像も、男性が地面を掘り起こし、女性がジャガイモを回収ないし植えつける役割を担っており、これもグアマン・ポマの挿絵と共通する点で、ジャガイモの栽培慣行の歴史的連続性が垣間見える場面である。

ところで、最も古い農業は、今から 1 万 5 千年前に東南アジアではじまったイモ作農業であるといわれており、そこで使われていた農具は、掘棒と鋤だけだったと言われている〔飯沼・堀尾 1984 : 5〕。また、

この掘棒は能率向上のために踏み鋤へと変化していき、イモ作農業も南太平洋の島々を経て中央アメリカまで広がったと考えられている [ibid. : 6-7]。他方、スペインからの農業慣行の導入という大きな変革期を経てもなお、中央アンデス高地ではこの踏み鋤がジャガイモ栽培に最も広く使われるのが現状である。こうした農業の伝播の歴史に鑑みれば、中央アンデスの踏み鋤は先スペイン期から現代まで、多くの文化接触を経験した中で、当該地域のジャガイモ栽培に最も適した農具として継承されてきていると言えるだろう。

なお、奇妙なことであるが、前述のコンパニョンのトルヒーヨの絵画集、そしてカハマルカ地方の農具を紹介する冊子の中にはこの形の踏み鋤は登場しない。両者とも生活場面で扱われる農具をその絵画の中に克明に描いているにもかかわらず、である。このことから、中央アンデス北部地方にはジャガイモ栽培に踏み鋤が定着しなかった、あるいはもともと別の農具を使用していた可能性があると見ることはできよう。ただし、この分析を進めるには有効なデータがあまりに不足しており、本稿でこれ以上掘り下げることは困難である。このような農具の地域分布研究に関しては将来の課題として残さざるを得ない。

(3) 牛犁 (ユンタ、yunta)

最後になるが、家畜動物を利用した農具の例として牛犁農耕を概覧してみよう。すでに述べたように、ウシやウマといった大型家畜動物は先スペイン期アメリカには存在せず、いずれも征服者の手によってアメリカ大陸に持ち込まれた。それ以前、中央アンデスで家畜化されていた大型動物に

はリヤマとアルパカが挙げられるのであるが、リヤマは主に荷物運搬用あるいは供犠用動物として、また時には食用として利用されたし、アルパカは採毛用として飼育されていた。したがって、農耕用の益獣として大型家畜動物が使用され始めたのはまさに植民地期以降であり、またそれゆえに、牛犁の技術は純粹にスペイン由来の農耕技術と言えるのである。

それでは、図像-17 および 18 を見ていただきたい。これらはいずれも前述のコンパニョンの画集に収められた牛犁の場面である。図像-17 は中央アンデスに典型的な牛二頭立てによる牛犁であり、図像-22 および 23 から分かるように、現代のアンデス農牧民の間でも広く利用されている。その一方で、図像-18 のように犁を引く家畜動物に明らかにウシとは異なる個体が使われていた形跡もある。この図像から判断する限り、この犁を引く家畜動物はウシの身体的特徴（偶蹄、角、細い尾）をもたず、体表面は長い体毛で覆われ、足はイヌ科ないしネコ科動物に特徴的な爪を備えている。この家畜動物の正体は不明であるが、牛犁導入元のスペインにおいても、過去 200 年の間に犁用の家畜動物にウシではなくラバが使われるケースが認められたことから [Foster, 1962 : 103]、農耕利用の益獣として他の動物を採用する選択肢もあった可能性はある。

牛犁を構成する農具は、犁と頸木である。まずは犁について見てみよう。前述のように、牛犁の技術そのものが征服者の流入とともにスペインから導入されたために、犁及び頸木ももともとヨーロッパの技術が根本にある。フォスターは、スペイ

ンで使用される犁の大まかな類型を示しているが（図像-19）、それらは2つのタイプ、すなわち歯犁（arado dental、図像-19中のa、b、c）と輻射犁（arado radial、同d、e）に分類される。前者は、重い犁床、犁床とほぼ直行する柄（mancera）、長柄と犁床とを接続する強く曲がった部品（garganta）によって、後者は犁先から柄まで連続した構造と一本のまっすぐな長柄によって特徴づけられる〔ibid. : 101〕⁵⁾。これらの形態学的特徴に基づき、フォスターは、前者のみがラテンアメリカに広く伝播したと報告している〔ibid. : 126〕。

しかしながら、中央アンデスの牛犁を見る限り、このフォスターの報告とは異なる現実がある。前述の図像-17および18に描かれた犁だけでは判断は困難であるが、カハマルカの農具の図解（図像-20）あるいは現代の高地農牧民の間で使用される犁の形状（図像-22）には、明らかにスペインの輻射犁と同じ構造が見て取れる。この違いの原因として、フォスター自身のラテンアメリカにおける主要な研究対象地域がメキシコであったこと、さらには、すでに述べたように「非先住民」地域での比較分析であったことなどが推測されるが、いずれにせよ、図像から判断する上では、中央アンデスでは歯犁ではなく輻射犁が現在でも多く使用されていると言える。

なお、頸木に関しては、カハマルカの農具集に紹介された首あて式の頸木が中央アンデスでは一般的になっている（図像-21）。図像-17および18からも、植民地期からすでにこの首あて式が用いられていたことが見て取れるし、現代の牛犁農耕の例からも首あて式が使用されていることが容

易に読み取れる（図像-22および23）。しかしながら、フォスターの見解はここでもまた異なってくる。フォスターによれば、スペインでは角頸木と首あて式の頸木両方が使用されているが、角頸木のほうが古い形態で、スペイン中部および南部で見られ、イスマノアメリカでも見られる普通の頸木であると述べている〔ibid. : 104〕。この違いを解明するには、当該地方農牧民社会におけるより具体的な物質文化の歴史を丹念に追跡していく必要があると考えるのである。

3. 問題点と今後の課題

以上、ここまで中央アンデスの物質文化の歴史的連続性／非連続性について、農牧民が日々使用する農具を対象として分析を進めてきた。また、その目的のために、年代記に見られる農具の利用状況と現代のそれとを比較し、さらに分析概念として「文化の結晶化」に注目することで、中央アンデス農牧民の間で使用される農具へのスペインからの文化的影響とを関連づけて検証を進めてきた。しかしながら、ここまでの議論はいずれも圧倒的な資料不足によって分析途上の状態にとどまっており、より綿密な検証のためには、膨大な量のデータ——無論、先スペイン期の考古学遺物等のデータを含む——を整理し、より詳細な分類体系を構築していく必要もあると思われる。こうした問題は、今後の中央アンデスの物質文化研究の基礎データを提示できるという意味において重要なポイントとなるであろう。

また、前述したように、「文化の結晶化」という概念に照らし合わせたとき、たしか

に既存の文化要素と外来の文化要素が接触した際に生じる受容・混淆・定着といった文化的動態は常識的に生じる現象であろうが、そこで生じる個別の事象に関しては一般化が困難なことは自明である。たとえそれが、比較的均質的にスペイン文化が導入されたと見られがちなラテンアメリカにおいても、である。フォスターが行ったように、イスマノアメリカとスペインとの壮大な比較の構図は非常に興味深くはあるものの、すでに分析したように、個別事例に着目すれば、容易に一般化できないことは明白であるため、対象を限定してより綿密な分析を目指す必要があるだろう。その意味において、友枝コレクションは非常に貴重な民族誌データを含んでおり、今後の研究推進に重要な資料となりうるのである。

最後に、本節で取り扱った農具に関しては、その発展や歴史的な取舍選択において当該地域の生業形態、とりわけ環境との間に大きな関連性がある点を指摘しておきたい。例えば、犁の形態に最も大きな影響を及ぼすものが土壌と気候であることは周知の事実であるし〔飯沼・堀尾、1976：8-9〕、また、すでに述べたように、ジャガイモ栽培が主生業である中央アンデス高地農牧民であるからこそ、イモ栽培に適した掘棒の発展形ともいえる踏み鋤が現在も使われていると言える。このような環境と生業形態、そして農具との関連性については、多様な環境区分をもつ中央アンデス固有の分析が可能であるとも考える。このような点にも留意し、今後の研究を進めたいと考えるのである。

おわりに

本稿では、第一部において、2008年度の友枝コレクション・デジタル化作業の進捗状況を報告するとともに、昨年度より開始した本学人類学博物館 Web での公開状況およびその利用状況について報告した。本計画は、今後さらに二年間のデジタル化作業を残しているが、中でも広く一般に利用可能なデジタル・アーカイブズ構築に関しては、本年度は大きく進展させることができなかった。今後は、人類学博物館をはじめ、関係各所との綿密な連携を継続しつつ、システム構築のための活動を強力に推進していきたいと考える。

また、第二部においては、友枝コレクションに収められた民族誌画像資料を活用し、中央アンデスの物質文化の歴史的連続性、とりわけ農具に見られる外来のスペイン文化の影響と在来文化の継承について分析を実施した。なお、この検討を通じて、前々号でも提起した民族誌画像資料の学術的利用の可能性の一端をも示すことができたのではないかと考える。今後は物質文化に関わるさらなるデータを広く渉猟するとともに、現地調査等を通じて現代の農具利用状況の把握、およびその背景にある農牧民の世界観の領域まで分析範囲を拡大し、その中で当該コレクションの学術利用を模索していきたい。

註

- 1) 本作業は、平成 20 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費、課題番号：No. 208028、代表者：加藤隆浩）に基づいて進められている。なお、本計画は平成 18 年度より開始され、5 カ

- 年計画で推進する予定となっている。
- 2) 中央アンデスの環境区分は、従来からこの高度域に従って設定されてきている。具体的には乾燥した太平洋岸地域チャラ（海拔0～500m）、温暖なユンガ（同500～2,300m）とキチュア（同2,300～3,500m）、寒冷な草原地帯スニ（同3,500～4,000m）とプーナ（同4,000～4,800m）、雪に覆われたハンカ（同4,800m以上）、アンデス山脈東斜面のアマゾンへと連なる亜熱帯地方ルバルバ（同1,600～400m）、そしてアマゾン地方低地との接点地域オマグア（同400～80m）である。
 - 3) 各々の地域には、所与の環境に適した生業形態および固有の栽培植物が見られる。いくつかの例を挙げると、ユンガではトウモロコシや豆類のほか、柑橘類などの果樹、棉、コカ、トウガラシなど温暖な地域特有の植物が、キチュアではトウモロコシやジャガイモ、そしてムギ類が栽培される。さらにスニやプーナでは、ジャガイモ、オカ、オユコなどの根茎類やキノアなどの雑穀類が栽培される。
 - 4) グァマン・ボマは、ペルー中部のワヌコ（Huánuco）の首長とインカ皇女との間に生まれた人物で、スペイン人到来前のペルーの歴史と、スペイン人統治下のペルー人の生活について、豊富な挿絵を含む1,179ページに及ぶ原稿を書いたことで知られている。また、1615年頃書かれたその原稿『新しい記録とよき政治（Nueva crónica y buen gobierno）』は、1908年にコペンハーゲンで発見され、アンデス植民地

初期に関する数少ない第一級の図像資料として現在も利用されている。

- 5) フォスターによれば、齒犁は今日のスペインの南部地方に位置するアンダルシア低地、エストレマドゥーラ西部そしてレオンに分布しており、考古学遺物から判断すれば、地中海沿岸に分布していた。他方、輻射犁はナバラ、アラゴン高地地方、ガリシア、バスク地方、アストゥリアスなどスペイン北部に分布していたことを報告している〔Foster, 1962 : 101〕。

参考文献

- Asociación para el Desarrollo Rural de Cajamarca (ASPADERUC), 1989 *Nuestras herramientas: Tradición cajamarquina, Proyecto Enciclopedia Campesina, Perú.*
- Compañón, Martínez, B. J., 1978 (1778-1788) *Trujillo del Perú, en el siglo XVIII*, Ediciones Cultura Hispanica, Madrid.
- Foster, George M. 1985 (1962) *Cultura y conquista: la herencia española de América*, Universidad veracruzana, México.
- 飯沼二郎／堀尾尚志 1984 (1976) 『ものと人間の文化史 19 農具』法政大学出版局
- 加藤隆浩／河邊真次 2006 「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」『南山大学人類学博物館紀要』第24号、pp.31-55
- 河邊真次 2007 「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション・データベース化の意義と学術的利用の可能性—アンデス民衆芸術「サルワの板絵」のモチーフとの比較研究を手がかりとして—」『南山大学人類学博物館紀要』第25号、pp.29-53
- 河邊真次 2008 「友枝啓泰アンデス民族学

画像コレクション・データベース化進捗状
況報告」『南山大学人類学博物館紀要』第

26号、pp.35-50

(友枝コレクション調査班)

表-1 人類学博物館ホームページ「館藏品ギャラリー」における画像展示内容

資料 No.	資料媒体	撮影時期	撮影場所	画像タイトル (撮影内容)
1964-01-002	6×6 プローニー、ネガフィルム	1964 年	アヤクチョ県ワマンガ郡ソコス	ケーナを吹く若者
1964-01-097	6×6 プローニー、ネガフィルム	1964 年	アヤクチョ県ワマンガ郡ソコス	村の守護聖人の祭り
1964-02-005	6×6 プローニー、ネガフィルム	1964 年	アヤクチョ県ワマンガ郡ソコス	角笛 (ワクラブク) を吹く楽隊
1964-02-084	6×6 プローニー、ネガフィルム	1964 年	アヤクチョ県ワマンガ郡ソコス	服喪中の女性
1964-04-008	6×6 プローニー、ネガフィルム	1964 年	アヤクチョ県ワマンガ郡ソコス	代父から贈られた教会を象った陶器
69028-19	マウントスライド	1969 年	ウカヤリ県プカリユバ	カヌーの船着場
69036-05	マウントスライド	1969 年	ウカヤリ県ヤリナコチャ (プカリユバ付近)	シピーボの切妻造の家屋
74003-30	マウントスライド	1974 年	ベネズエラ・オリノコ川支流マキリタレ族	椰子の葉で編んだ背負いかご
75003-01	マウントスライド	1975 年	リマ県カネテ郡マラ	幹線道路沿いのキオスク
75004-12	マウントスライド	1975 年	アンカシュ県ラ・パンパ	ボンチョを織る男性
75014-09	マウントスライド	1975 年	アンカシュ県ヤクパンパ	パンを焼くかまど
75015-34	マウントスライド	1975 年	アンカシュ県ヤクパンパ	「チリ人」の仮面舞踊
75017-20	マウントスライド	1975 年	アンカシュ県	火打ち石と火打ち金を使う陶工
75028-32	マウントスライド	1975 年	ウカヤリ県セパワ	虱を取るピーロの母娘
75030-13	マウントスライド	1975 年	ウカヤリ県セパワ	幻覚状態で治療を行うピーロのシャーマン
75030-24	マウントスライド	1975 年	ウカヤリ県セパワ	タバコの煙を使った治療
75030-30	マウントスライド	1975 年	ウカヤリ県セパワ	有害な物質を吸い出すピーロのシャーマン
79010-25	マウントスライド	1979 年	アプリマック県ルカナス郡高地	羊毛を紡ぐ牧民男性
79015-06	マウントスライド	1979 年	アプリマック県アイマラエス郡メスティサス	雄リヤマのキャラバン
79016-13	マウントスライド	1979 年	アプリマック県アイマラエス郡カライバンパ	角笛 (ワクラブク) の演奏
79030-05	マウントスライド	1979 年	フニン県ワンカーヨ市付近の高地	踏み鋤 (チャキタクリヤ) を使ったジャガイモの植えつけ
81057-15	マウントスライド	1981 年	アプリマック県アイマラエス郡メスティサス	アグストクイ: リヤマとアルパカの繁殖儀礼
81058-22	マウントスライド	1981 年	アプリマック県アイマラエス郡イスカワカ	メサ: アグストクイ儀礼のために設えた祭壇
81058-34	マウントスライド	1981 年	アプリマック県アイマラエス郡イスカワカ	トウモロコシ粉、リヤマの脂肪、コカの葉などで作られた動物像
81061-30(*)	マウントスライド	1981 年	アプリマック県アイマラエス郡チャルワンカ	日干し瓦作り
83001-27	マウントスライド	1983 年	クスコ県クスコ市アルマス広場	コルプス・クリスティの行進に参加するほら貝奏者
83009-32	マウントスライド	1983 年	ボリビア共和国ラ・パス県サアベドラ郡アマレテ	オカの塊茎を水に浸す準備 (カヤ) の開始
85001-23	マウントスライド	1985 年	ボリビア共和国ラ・パス県ソラタ	フェリア: アイマラの町の定期市
85003-05	マウントスライド	1985 年	ボリビア共和国ラ・パス県イタラケ	アイマラ人音楽家の一団
85015-31	マウントスライド	1985 年	クスコ県ウルバンパ郡チンチェーロ	今やよく知られるチンチェーロの定期市
85017-19	マウントスライド	1985 年	クスコ県カルカ郡高地シウサ	アグストクイ: 8 月に行われるリヤマとアルパカの繁殖儀礼
85018-28	マウントスライド	1985 年	クスコ県カルカ郡高地シウサ	アグストクイ儀礼の神聖な道具類
85019-07(*)	マウントスライド	1985 年	クスコ県カルカ郡高地シウサ	草の煎じ液を混ぜたチチャを飲まされる雄リヤマ
85019-21	マウントスライド	1985 年	クスコ県カルカ郡高地シウサ	セニヤラクイ: リヤマの耳に色リボンを飾る行為
85019-23	マウントスライド	1985 年	クスコ県カルカ郡高地シウサ	セニヤラスカ: チチャと新しいリボンでリフレッシュしたリヤマ

(出典: <http://www.nanzan-u.ac.jp/MUSEUM/gallery/>)

上記(*)は、HP 上に記載の資料 No. に誤りがあるもの。次回更新時に修正予定。

表-2 人類学博物館 HP「館蔵品ギャラリー」ビュー数の推移

	2007年9-10月	2007年度下半期	2008年度上半期
ページビュー合計（件）	669	2,239	2,416
ページビュー月平均（件／月）	392	375	403
国外からのビュー数（件）	63	286	510
国外からのビューの割合（％）	9.4	12.8	21.1

Continuity and Discontinuity of the Material Culture in the Central Andes: Comparative Investigation of the Historical Paintings and Ethnographic Photographs from the Tomoeda Collection

KAWABE Shinji

In March 2005, the Anthropological Museum of Nanzan University acquired a substantial collection of ethnographic photographs from Dr. Hiroyasu Tomoeda, the Andeanist who has been researching for more than 40 years. In order to make the best use of this massive collection containing more than 40,000 photographs, we have been working on the project that aims to convert them into a database of digital images since 2006. At the point reasonable progress has been made on this project, with some problems that would be resolved in future. Last year the Museum started to provide a part of the collection on the Website, and there have been accesses exceeding our expectations.

Photographs from the Tomoeda Collection can be used for further studies from many aspects. In the latter part of this paper, I make a preparatory investigation of the history of material culture among farmers in the Central Andes by using both historical paintings and digital images from the Tomoeda collection.

Farmers in the Central Andes now use three types of farming tools for digging the field: hand plow (cuya), spade (chaquitaqlla) and traction plow (yunta). By comparing the photographs from the collection with paintings made in the 17th and 18th centuries, some specific features can be suggested which imply the continuity and discontinuity of the material culture. The study of farming tools has already been carried out by George M. Foster in 1960s to some extent, though the range of his study was rather limited. It is expected that the collection made by Dr. Tomoeda will provide resources for further studies.



1964-01-002



1964-01-097



1964-02-005



1964-02-084



1964-04-008



69028-19



69036-05



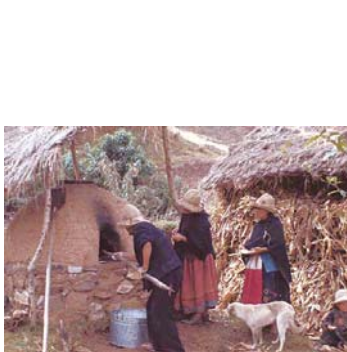
74003-30



75003-01



75004-12



75014-09



75015-34

南山大学人類学博物館ホームページ「館蔵品ギャラリー」における展示画像①



75017-20



75028-32



75030-13



75030-24



75030-30



79010-25



79015-06



79016-13



79030-05



81057-15



81058-22



81058-34

南山大学人類学博物館ホームページ「館蔵品ギャラリー」における展示画像②



81061-30



83001-27



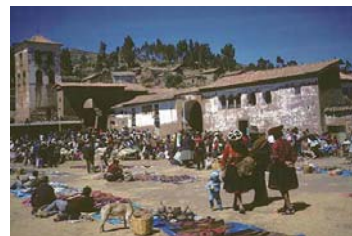
83009-32



85001-23



85003-05



85015-31



85017-19



85018-28



85019-07



85019-21



85019-23

南山大学人類学博物館ホームページ「館蔵品ギャラリー」における展示画像③



図像-1
[Guaman Poma, 1993: 910]



図像-2 [ibid.: 912]



図像-3 [81006-11]



図像-4
[Compañon, 1978: 64]



図像-5
[Compañon, 1978: 65]



図像-6 [81015-32]



図像-7 [81015-33]



図像-8 [83004-34]

中央アンデスの農具 (1) : 手鋤 (cuya)



図像-9
[Guaman Poma, 1993 : 43]



図像-10 [ibid. : 929]



図像-11 [ibid. : 930]



図像-12 [81006-14]



図像-13 [81008-28]



図像-14 [83015-22]

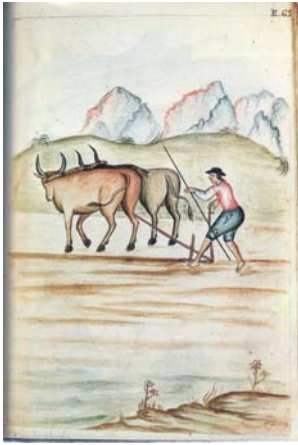


図像-15 [81015-33]



図像-16 [87078-04]

中央アンデスの農具 (2) : 踏み鋤 (チャキタクリヤ)



図像-17 [Compañón, 1978 : 62]



図像-18 [ibid. : 63]

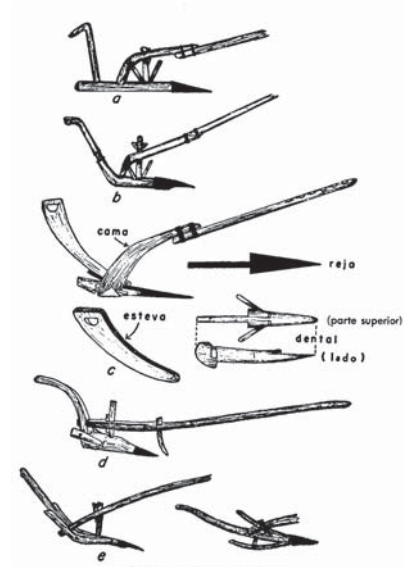
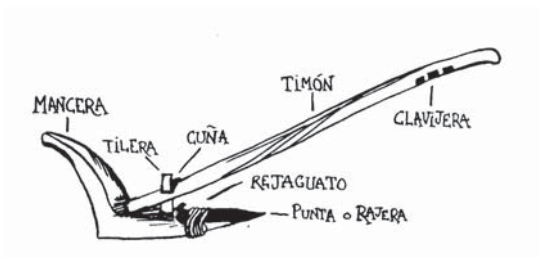
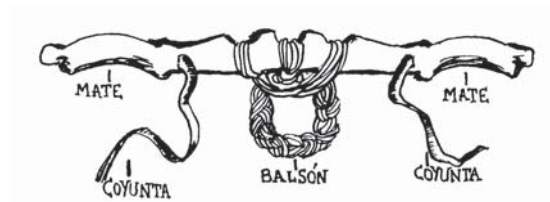


Fig. 1. Tipos de arados españoles.

図像-19 [Foster, 1962 : 102]



図像-20 [ASPADERUC, 1989 : 20]



図像-21 [ibid. : 21]



図像-22 [79013-12]



図像-23 [81082-11]

中央アンデスの農具 (3) : 牛犁 (ユンタ)

南山大学人類学博物館資料評価委員会の活動から

大塚 達朗

(1)

南山大学人類学博物館には、運営委員会とは別に、資料評価委員会が設置されている。その仕事は、寄贈品の申込みが博物館にあったときに、それを受け入れるべきか否か、その資料的価値を評価するための委員会である。ここでは、受入れを決めた資料を紹介して資料評価委員会の活動を紹介することを兼ねたい。

2007年11月14日に、本学名誉教授より、アルミ製弁当箱1点の寄贈の申し出があった。背景情報としては、ご子息が30年以上前に使っていたとのことであった。2008年8月7日に開かれた資料評価委員会は、検討の結果、受入れを決めた。写真(図版01)に示されたアルミ製蓋付弁当箱がそれである(身:14.5cm×10.5cm×3.5cm)。1970年代に使われたものと思われるありふれた子供用弁当箱であるが、なぜ人類学博物館の資料として受け入れたか、“ガラクタ集め”ではない、大量消費財を文化資源として集める意味を説明しておきたい。

(2)

本資料を前に委員の間でさまざまな思いで話に花咲いたが、筆者は小学校1年生の時の出来事を思いだし、それを話した。筆者は1958年に埼玉県南部のある小学校に入学した。1956年の経済白書が「もはや

戦後ではない」と明記し、戦後復興の終了を宣言したあと、輸出拡大などで日本経済の急成長がはじまったころである(最近ヒット映画「ALWAYS 三丁目の夕日」が描いたのがこのころであった)。ちなみに、モノクロテレビと洗濯機と冷蔵庫が“三種の神器”として日本中で喧伝されていた時代である。

さて、入学した小学校は街中にあり、団塊の世代の上級生でせまい教室はすでにあふれていたために、この年に校舎が新築された。校舎新築中、学校給食が停止されたために弁当持参となったときの禁止事項を話した次第である。にぎり飯の場合、海苔でくると巻くのは禁止であった。弁当箱の場合、白米に海苔をのせることや、醤油で味付けした削り節を白米の間にはさむのは禁止であった。今でいう“のり弁”が禁止であった。このころ、白米がかなり当たり前になっていたようであるが、そうではない子どももいた。にぎり飯の具や弁当のおかず、梅干・漬物・佃煮・塩鮭などは入れて当然であるが、卵焼きは砂糖抜きが決まりで、砂糖入りの卵焼きは禁止で、でんぶや鶏そぼろなども禁止で、何かと禁止品目が多かったのである。その理由は、まだまだ貧しい世情を考慮して、生徒みな平等で楽しくということを教員が願ったことのように、少なくとも1年生全クラスがそうであったと記憶している。

これは、1958年、ある地域の戦後民主主義教育の一風景で、この寄贈品に出会わなければ思い出すこともなかったかもしれない。やがて校舎が新築されると、最新設備で学校給食が再開され、ぱさぱさのコッペパン（のちに時々揚げパンがだされ、それは私たちに人気があった）を食べながら想像を絶するほどに不味い脱脂粉乳を飲み干さなければならない“苦行難行”がかなりあとまで続いたのである（鯨肉の竜田揚げはそれほど嫌いではなかった）。

1958年、国策で、脱脂粉乳から牛乳への交替が図られたが、完全に牛乳になったのは、しばらく後になってからであった。だが、脱脂粉乳・牛乳嫌いの筆者は、給食で牛乳にいつ替わったかは全く記憶がない。

(3)

1970年代に実際にこの弁当箱を使った者であれば、おかずは違うはずであろうし（たとえばタコさんウィンナー）、入っていたのはそのころならば白米ではなかったかもしれない（まぜご飯やチャーハンなど）。使っていた本人あるいは同世代の者ならば別の過去が想起されたはずである。本人の母親ならばまた別の過去が思い起こされるであろうなど、個個人それぞれ様々な語り口で十人十色の記憶が喚起されるであろう。

ここで指摘しておきたいのは、大量消費にさらされた見方によればたわいない弁当箱が遡及的配視思考に開かれていることである。遡及的配視思考というのは系統樹的思考（物事の分岐の筋道を枝葉の先に向かって追いかけること）や歴史学的思考

（変化の筋道を時間の経過とともに特定方向に下ること）とは真逆の体験・認識を可能にすることである。

大量消費財だからこそ、それにかかわる語り口は一見するとバラバラで、惹起される記憶は異なっており、秩序立った話が展開され得ないのは当然である。だが、ランダムに展開される話から何が反復されているかを解読する、あるいは、それらを何か結びつけていることを解析することは、“大文字の歴史”（「何時代は何々であった」的な概括が支配する言説）からは外れてしまった過去から意外な発見を可能にしてくれるはずである。“大文字の歴史”は“制度化された知識”の謂であり、いずれは陳腐化を免れないのであるから、過去を“大文字の歴史”の中に閉じ込めてしまうのではなく、個個の人びとの個人史にかかわるディテールまでも鳥瞰できるように、過去を活用できるような方策が物質文化を扱う研究者には求められているであろうと考える。ましてや、博物館ならばなおさらである。

そう考えてくると、いつ造りはじめられいつ無くなってしまったかも分からない大量消費の生活財の収集・保管・展示は今日的課題といえよう。だが、今日的課題といった時、人類学博物館の掲げる文化資源学と関係して、もう少し説明しておく必要がある。

(4)

日ごとの生活では、いろいろなモノ（道具・装置・施設など）が使われ、いろいろな記録（文書）のやり取りを通じて今の生活が成り立っており、様々な記憶の中で自

分（たち）をみつめながらあれこれと思案をめぐらして私たちは生きている、といえるであろう。モノも記録も記憶も今日の高度な消費社会では、実にはかない存在ではあるが、これらがあればこそ今の生活が成り立っているのである。生活上不可欠なモノや記録や記憶を文化資源と定義すれば、それらはある時代を知る手掛かりとなる有形無形の存在であるが、他方何ら手段を講じなければすぐに消滅してしまうのである。

であるからこそ、人類学博物館に関わる者としては、文化資源の利用および再利用のためにどのような手立て〈資源化〉があるかを考えておかないと、次世代に向けて活力ある社会を維持することは難しいと考えている。したがって、人類学博物館の大方針である文化資源化の一環として、上記した弁当箱が大量消費財故に遡及的配視思考に開かれている存在であることに着目し、受入れを決めたのである。

(5)

今後の弁当箱の収集とかかわって、筆者が考えている細かな論点も、つぎに記しておこう。

中身（主食・おかず）がどのような変化をしたかは大事であるが、とくに気にしているのは、身体動作として「左手に飯碗、右手に箸」的に使われたかどうかである。これは、主食である米を食する際の中世以来普及した日本人としての身体動作であるが（日本人を本質論的に定義できるとは考えない立場に筆者はいて、食事の身体的動作で定義するならば、という意味である）、弁当箱の場合、飯碗と同様に、指掛けの手

持ちで、最後には弁当箱の端に口をつけて箸で飯を掻込む食べ方（接吻方式）が今ではどうなのであろうか、先割れスプーンが箸の代用にどの程度なっているのかなど、日本人的程度の移り変りを計る上で、調べてみたいと思っている。ちなみに、写真を見ると弁当箱の四角がまるみをおびているのは、そのような持方、食べ方と無関係ではない。もちろん、各家庭の食卓での「左手に飯碗、右手に箸」がどうなっているかも並行して検討していくことにしている。

というのも、今日諸方面から盛んに食文化の崩壊がさげばれ警鐘が鳴らされ続けられていても（日本の敗戦後、アメリカの対日本政策が大きな原因をなしていたことが、近年大きくクローズアップされている（鈴木 2003））、個人レベルで話を聞いていると（筆者が担当している共通教育科目「考古学A」（毎年秋学期開講））、危機意識が希薄なように感じるのであるが——原因はもちろんいろいろ考えなければならぬ——、「左手に飯碗、右手に箸」という身体動作が依然として保持されていることが日本人として生きていることを担保して、事態の深刻さをみえにくくしているように思われるからである。

それに追い打ちをかけているのが、多くの日本人が今正しいと思っている栄養という視点であろう。いろいろな食物から片寄り無く栄養をとることを心がけながら、「左手に飯碗、右手に箸」的な身体動作を保持することで、米食という主食のある世界の食文化（日本食文化）の意義が私たちには分からなくなっているというのが、考古学を専門とする筆者の危惧である。今現在、主食である米をどう食べるか（1945

年までは、白米ではなく玄米や分つき米が食すべきものとして真剣に議論された)は必ずしも大きな論点になっていないようであるが、1945年までの論点が忘失され白米が前面に出てきたことはよく考えるべきであろう。鈴木猛夫の論(2003)には重大な示唆があるが、小論の性格上、ここで擱筆することにする。

文献は以下に2冊掲げるにとどめるが、

筆者が担当する「考古学A」で紹介しているものである。

引用・参考文献

鈴木猛夫 2003 『「アメリカ小麦戦略」と日本人の食生活』藤原書店。

原田信男ほか 2004 『日本の食文化』放送大学教育振興会。

(南山大学人文学部教授)

Modern Commodities among the Museum Collection

OTSUKA Tatsuro

This brief report presents an aspect of the activity of the Material-Evaluation Committee of the Anthropological Museum of Nanzan University.

The museum has acquired a large amount of modern commodities for the collection for many years. A lunch box used in the 1970s, recently acquired from one professor emeritus at Nanzan University, was newly accepted. The committee decided to accept this small item in order to show that such a kind of material may imply some sort of physical action or behavior quite natural for Japanese people, which can be a subject of folk studies.



蓋をした弁当箱（アルミ製）



蓋をはずした弁当箱（四角のまるみに注目）

平成 21 年 3 月 18 日 印刷

平成 21 年 3 月 24 日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第 27 号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

TEL 052(832)3111 (代表)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町 19-20

TEL 052(871)9190